『途方に暮れた僕はそっとため息をついてみる』

篁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『途方に暮れた僕はそっとため息をついてみる』

【Ｎコード】

Ｎ３４７４Ｙ

【作者名】

篁

【あらすじ】

改めて連載を再開させていただきます。

本家『篁のブログ』より遅れての掲載になりますがご了承ください。

読んでいただける方が少しでもいらっしゃれば、嬉しいです。

よろしくお願いします。

プロローグ

プロローグ

「小鳥遊翔平（たかなし しょうへい）くん、だね？」

確かに僕の名前は、小鳥遊翔平だ。

高校一年生から、サッカー部では不動のセンターバック。ディフェンスの中心として活躍している。

といえば、聞こえはいいけど、それは僕がたまたま背がひょろ高く、小学生の時には空手を習っていたため、蹴る力は他の部員より強かったからにすぎない。それならフォワードでも、と思われるかもしれないが、蹴る力は強くても、僕が蹴るボールはどこに飛んでいくかは神のみぞ知る、なのである。ゴールキーパー前に配置しておけば、取りあえずのピンチは防ぐことができるだろうという監督の直感ではなく、弱小サッカー部のため、圧倒的に部員が少ないという事実が、僕をレギュラーたらしめているというのが、多分正解だ。

実際、一年生の時は、早速四月半ばの県大会に出場し、僕がクリアしたボールが見事にゴールに突き刺さる。しかし、監督は僕を起用した自身の慧眼に自画自賛、というわけにはいかなかった。つまり、僕が蹴ったボールは味方のゴールを激しく揺さぶったのだった。例年通りの初戦敗退がここで決まった。

二年生になった頃には、さすがに自陣の反対方向にボールをクリアできるようになったが、それでもコントロールが一向に身に付かない僕は、センターバックのポジションに固定されたまま。

土曜の空しい部活での練習を終え、帰宅する途中だった。

よく見かける灰色のプリウスが自転車に乗っている僕の前方を塞ぐ。

車から降りてきたのは五十前後と思われるスーツ姿の男性で、僕の進路妨害に悪びれた様子もなく、普通のサラリーマンよりは少し目力のある視線を遠慮無く僕に浴びせながら、僕の名前を確認してきた。

「そうやけど、なに？」

僕のあからさまな腹立ちと懸念を帯びた視線を泰然と跳ね返し、その男性は言った。

「やはり、似ているな」

「は？」

「君の父親、祐司（ゆうじ）に、だよ」

「親父を知っているの？」

「腐れ縁だ」

「はあ」

「私は垣内。君のお母さんから頼まれて、といえば私が何を言いたいのか分かるかな？」

「お袋？」

思い出した。

先日僕は、『バイクの免許が欲しい』、とお袋に言った。勿論校則に違反するが、お袋の倫理観はありがたいことに世間と多少はズレている。

「お父さんの知り合いにアルバイトを頼んであげる。自分で稼いだお金で免許を取ってバイクを買うのなら、反対はしないわ」

親父は忙しい商社マンだ。数ヶ月海外で勤務を終え、だらりと家で二、三日過ごした後、また数ヶ月海外へという生活を送っていた。

そして、数ヶ月が数年になり、僕は丸三年親父に会っていない。

小さい頃は道具を持たずに山にキャンプに行き、そこでどう一夜を過ごすか、等という子供への慈愛がまったく感じられない遊びに良く連れて行ってもらったものだ。しかし、今の生活では親父の存在は限りなく小さい。

というわけで、お袋のＯＫが出れば、僕は自由に行動できる。

「バイトのこと？」
「そういうこと」
サッカーは大好きだ。でも、単独行動が好きで人見知りの激しい僕に団体競技は難しい。ただボールを大きく外へ蹴り出すだけが役目の僕に話しかけてくるチームメイトだってほとんどいない。それに観戦するのと実際にプレーするのとでは大違い。
頭の中でその食い違いを認識し、この違いの差が埋まることはない、と自信を持って確信した僕は、サッカー部を退部することにした。
そして、それが僕が高校生探偵を始めるきっかけになったのだった。

vol. 1

―1―

昨日は、秒殺（びょうさつ）だった。探偵業の世界では、ターゲットがマンションや会社など、建物を出た瞬間を見逃してしまうことを秒殺と揶揄される。

人がマンションから出て歩き去る、もしくは会社から出て雑踏に紛れるまでにかかる時間は約二、三秒。一日は、八万六千四百秒だから、丸一日中張り込んでも、八万六千四百秒のうちわずか数秒間目を離しているだけで、ターゲットはあっさり行方をくらませる。

テレビや小説などと違って実際の張り込みは地味で、苦労も多い。尿意を催すことだってあるし、ふと視線を外し、周りを眺めることだってある。それに、近所の住人等から不審人物と思われてもいけない。昨今、不審と思われたらすぐ警察に通報され、職務質問などを受けてしまうことも多い。張り込みは違和感なく風景に溶け込むことが第一で、それが案外難しい。

僕の場合、一日中張り込む必要などはなく、退社後のターゲットの素行調査を行うだけだったので、勤務時間終了前の一時間程度前から、目立たぬように会社の出入り口を見張っていれば良いだけだった。

それなのに、ターゲットが退社する一瞬を見逃し、それから約四時間後、会社が消灯されるまでずっと監視を続けるハメになったのは、八月中旬の十分蒸し暑い気候のせいだったのか、通りを我が物顔で闊歩する女子高生の代わり映えのしない太い足に視線が泳いでいたせいか。大学受験を控えた貴重な高三の夏休みを僕は有意義に過ごしているのだ、と自分を慰める。

夏休み中くらい私服を着ればよいのにセーラー服を着ているのは、援交の客寄せのためなのか、学校の補修でもあるのだろうか、

いずれにせよ、事務所に戻った僕は、残業していた垣内所長に大目玉をくらうことになった。

◇

僕のアルバイト先であるシーク・エージェンシーは、神戸の本社のほか、大阪と京都に支社があり、それぞれ十五人程度の探偵を抱えている。所長の口癖は、『今時ハードボイルドを気取って一人で探偵事務所を構えている奴にどれだけの仕事ができるんや』である。

実際、探偵業にとって必要不可欠なものは、『人脈』、言い換えるなら幅広い情報源、そして調査に割くことの出来る人員の量に尽きる、と言ってしまっても過言ではない。勿論、個々の探偵の技量が優れていれば、それだけ調査の成功率も高くなる。それぞれ尾行が得意だの、聞き込みが得意だの、分野は違えど、優秀な人員を揃えていれば、やがて調査の成功が評判になり、初めてその探偵社は利益を出し始めるのだ。

うちの事務所には違法だが、企業のコンピュータへのハッキングが得意な先輩も居て、調査に役立つ情報を素早く入手することも可能だ。そんな具合に現実を見つめると、映画のように夜な夜な酒場でバーボンをあおり、トレンチの襟を立てて歩くような探偵は食事にもありつけないことが分かるだろう。

面白いことに、シーク・エージェンシーでは、本業の探偵社の他に、ホストクラブや高級クラブを経営しており、そっちの方が多くの利益を生む月も多い。

これらは、各方面の情報を収集する場であり、人脈を築いて新たな顧客を確保する手段であると同時に、新人探偵の修行の場でもある。

高級クラブ『銀縁（ぎんえん）』には、会社でもそれなりの地位のある客が多く、クラブのママがそれとなく、優秀な探偵社があるのよ、なん

て言うと企業採用選考中の人事部門の部長なんかは、選考対象者の素行調査、履歴書の真偽や、中途採用者の場合の前の会社の退職の理由などの調査の依頼を確保することができたりもする。
新人探偵は、採用後半年はこれらの店で働かされる。勿論、アルバイトの僕だって例外ではない。
ほとんどの従業員はホストクラブや高級クラブに正式に努めている人達で、所長は『銀縁』を開業するにあたり、わざわざ辣腕のママをスカウトしてきたと聞いている。
新人探偵の『修行』期間の半年間は無給で、客からのプレゼントなど自分の才覚で得たものだけが、給料の代わりとなる。当然、ここの時点で辞めていく者も多い。
僕はホストとしての半年の修行を、清く正しい高校生という気概を持って慎ましいホスト初心者を演じ続けた。実際にはただ人見知りの不器用なだけだったのだが、不思議と『かわいい』などと主に水商売系のお姉様方に人気もあって、随分稼がせていただいた。高校生活と夜のホストで寝不足が続いたが、多少は人見知りも改善され、笑みを浮かべながら話を聞き流す術も身につけると同時に酒も煙草も覚えてしまった。聞き込みに役立つ会話術を獲得したのは勿論、バイクの免許も無事取得し、バイクも購入することできた。

◇

今回のターゲットは、影山良和（かげやまよしかず）。
例に漏れず、浮気調査だ。
「最近帰宅時間が不規則になり、夜中になることも週に一回はあるんです。主人は仕事だって言うけれど、今まではそんなこともなかったので、もしかしたらって思って・・・」
妻である依頼者の探偵社にとってはありきたりのものだった。
「取りあえず一週間、素行調査をしてみましょう」
依頼を請け負った所長は、依頼者にそう答え、多分簡単な調査だ

からという理由で僕にその仕事を回してきたのだった。
通常、尾行を伴う素行調査は、二、三人のチームで行うことが多い。それも当然のことで、ターゲットが途中でタクシーに乗り込む場合もあるし、疚しい心の持ち主はとかく変な行動を取ったりもする。撒かれてしまわないように備え、車で待機する者、徒歩で尾行する者など役割を分担するのだ。ホストクラブでの修行を終えた僕は、そんなチームプレーで、実際の探偵業を学んでいる途上と言えた。
そんな中、初めての単独調査である。
所長にしてみれば僕にどれほどのことができるのか、試してみようってことなのかもしれない。当然、正式な依頼に基づく調査なので、もしかしたら、尾行の得意な大石さんあたりが、どこかで僕のバックアップをしているのかもしれなかったが。
初日はあっさり秒殺された僕だったが、二日連続で秒殺される訳にもいかない。影山氏の勤務する会社は、三宮のオフィス街にあった。
三宮は、西側に連続している元町や神戸駅周辺とともに、神戸都市圏の中心業務地区を構成する県内随一の繁華街である。多くの鉄道路線が集中する三宮駅を中心に商業施設が集まり、神戸市役所に近いビジネス街でもある。
幸い、影山氏の会社は、センター街と呼ばれる繁華街に近く、夕方にもなれば、涼を求めるサラリーマンや学生でごったがえすため、人待ち風に佇んでいても不審がられることもない。
影山氏がタクシーを拾っても対応できるよう、愛車である中型バイクを乱雑に自転車が並べてある辺りに停めて、僕は作戦を練る。
仮に、影山氏が駅北の繁華街のキャバクラとかに行っても怪しまれず尾行するために、わざとラフな格好をしている僕は、尾行をカモフラージュすることを思いついた。
サッカーをするには少しは僕の役に立った身長も、探偵にはあまり向いていないのが事実だ。探偵としては不幸にも背がひょろ高

い僕は、ホストクラブではその身長の高さが好結果を生み出しもしたが、本業の尾行を単独でするなら怪しまれやすいという欠点になる。人混みから頭一つ抜け出す僕は目立って仕方がないからだ。

しかし僕は現役高校生。まさか高校生くらいの年齢の奴が跡を付けてもそれを尾行と感づかれることはまず無いであろうが、念のためにキャッチを装うことを思いついた。女子中学生や高校生とうだうだ喋りながら後ろを付いてくる人間を自分の尾行者だと感づく人間もそういないだろうという計算だ。真面目そうな子は避けた方が無難だ。どちらかと言えば今風の没個性的に日焼けさせ、必要以上に目の回りに化粧を塗りたくり、ゲーセン周りでたむろしている女子高生なら面白がって、話に乗ってくれるかもしれない。

カラオケ屋の前で、しゃがみ込んでいる三人組の前に立ち止まった僕は、彼女らの正面に同様にしゃがみ込む。彼女たちは、僕の行っている高校の制服を着ていたが、恐らくはまだ一年生か二年生。見覚えがないという理由でそう決めつける。

「なあ、ちょっと面白いことしようと思ってるんやけど、手伝ってくれない？」

「なんよ？」

「うざいんやけど」

「これってナンパ？」

三者三様の返答が返ってきた。ホストクラブでお姉様方を誑し込んだ僕の笑顔でも、彼女たちには通用しないらしい。

「ただでとは言わへんよ」

僕は三枚の五千円札を彼女らの前に差し出した。『出費を惜しんでは結果は出ない』といつも言っている所長の言葉を信じてみることにする。

「こんな端金で、まさか売春（うり）でもやれってんじゃないよね？」

リーダー格らしき、ひときわ目の周りを黒くしたパンダのような子が言う。

「まさか」

「じゃあ、なんよ？」
パンダは何にでも八つ当たりしたい気分のようだった。何にでも八つ当たりしたいのはこっちの方だと言いたいのをぐっと飲み込み、人選を誤ったかなと思いつつ、僕は言葉を続ける。
「俺さ、こう見えても探偵やねん」
パンダを筆頭とする三人組の目に興味の色が浮かぶ。
「マジで？」
「おもろそうやん」
「で、何すんの？」
最後に言葉を発したパンダは僕の手から全ての五千円札を受け取り、残りの二人に一枚ずつ配る。
「浮気調査してんねん」
「おお、マジ探偵やん」
パンダも乗り気になってきたようだ。
「おっさんを尾行するんやけど、一人じゃ目立つやろ。だからちょっとツルんで歩いてくれるだけでいい」
「そんだけ？」
「ただ、いつ会社から出てくるか、分からへんし、その間は暇やで」
「探偵ってちょっとわくわくせえへん？」
パンダが子分に同意を求める。全員一致で僕の偽装に付き合ってくれることになった。
会社の出入り口が見えるところまで移動した僕たちは、そこで待つことにする。ファーストフード店で、ハンバーガーとジュースを奢ってやり、しゃがみ込んで雑談しながらの張り込みとなった。
「わたしさ、探偵ってもっと渋いおっさんがやってると思ってた」
パンダが話しかけてくる。僕だって、あと十数年もすれば少しは渋くなれるかもしれない。だからといって、こんなパンダどもの思い通りになっていくのも少し癪に障る。
「まあ、テレビや小説では、そんなんが活躍してるよなあ。うちの事務所にも渋いおっさん探偵はおるよ」

会社の出入り口から目を離さず、僕は所長や大石さんを思い浮かべながら答える。そろそろ、影山氏の退社時刻のはずだった。三人組には影山氏の写真を見せている。とても信頼はできないが、僕が再度秒殺される可能性はわずかでも減っている方がいい。

「なんか殺人事件とかに巻き込まれたりっていうの、ほんまにあるん？」

「それこそテレビの見過ぎやわ。探偵ってのは地味で忍耐がものを言う商売やで」

パンダの子分一号はそれでも、探偵に夢でも見てるのか、「でも、なんか格好ええなあ」と呟いている。取りあえず、普通のサラリーマンよりは女子高生にとって魅力のある仕事なのかもしれないが、確実に言えることは、サラリーマンより安月給だということで、だからといって、普通に付き合って金を巻き上げるならサラリーマンの方がええよ、とまで忠告してやる義理はない。

「あんたとやったら、付き合ってもええよ」

急にパンダが上目遣いで僕の顔を見ながら言い出す。

「ありがたいなあ」

迷惑さを微塵も見せず、僕は表情を緩めてみせる。それくらいの度量がなければ、探偵なんか務まらない。

「あ、あの人ちゃう？」

僕が影山氏を確認したのと同時にパンダ子分二号が声を上げる。

「よし、跡をつけよか」

通常、尾行は風景に溶け込んでしまうのが最も良い。三宮の雑踏の中では、サラリーマン姿で尾行するのが当然という考え方もあるだろう。しかし、影山氏が普段通りＪＲで帰宅するならそれでも良いが、もし浮気相手が実際に居て、ホテルまでタクシー移動をするのなら、スーツ姿や学生服でバイクに乗る僕は返って目立ってしまうことになる。色々考えた結果の今日の出で立ちだった。

緊張のせいか、少し寡黙になるパンダ三人組に「陽気に笑って」などと声をかけながら、影山氏の後を追う。少々近づいてもこの三

人と一緒なら大丈夫だと判断した僕は、影山氏との距離を縮める。
「こんなに近づいて大丈夫なん？」
パンダが僕に問いかける。
「俺らを見て、誰かを尾行してると勘づく奴がおったら、そいつは凄腕の探偵か刑事になれるで」
三人組は顔を見合わせ、得意気に鼻を膨らませ、にやにや笑った。
影山氏の背中に視線を固定させ、三宮駅方面に向かって歩く。子分一号と二号は時折笑いあいながら、僕とパンダを挟んで歩いている。意外にも彼女たちは、うまく演技をしている。度胸があるのか、感性が鈍っているのか、いずれにしても僕にはありがたい誤算だった。
影山氏が駅に入ってしまえば、彼女たちは用無しで、僕はそこで彼女たちと別れ、影山氏と同じ電車に乗り込む予定だった。
しかし、影山氏は駅の高架を通り過ぎ、飲食店の建ち並ぶ繁華街方向へ向かっていく。人混みの中で、影山氏を追うのは容易で、影山氏もまさか自分が尾行されているなどとは予想もしていなかったのだろう。一度も後ろを振り返ることもなく、一軒の喫茶店に入っていった。
続いて僕たちも喫茶店に入る。
影山氏は、奥の二人用のテーブル席に一人で座っている。僕たちは、影山氏と、もしかしたら来るかもしれない相手を横から同時に見ることが出来るテーブル席に座った。彼女たちもそれぞれ席に座る。パンダに椅子の位置を移動させた僕は、影山氏の視界からは僕を消し、なおかつ僕はじっと影山氏を観察できる状態にした。
僕は珈琲を注文し、彼女たちはそれぞれ好きなパフェやらケーキやらを注文した。僕はリュックの中からボールペンタイプの高画質のデジタルビデオカメラを取りだし、影山氏にピントを合わせ、紙ナプキンスタンドに差し込み、固定させる。
「えっ、それボールペンちゃうの？」
子分二号が、興味津々という感じで言う。

「ビデオカメラや」
「すっごぉい」
「探偵はこういう小物も自分で作らなあかんのや」
パソコンマニアで小物好きの凄腕ハッカー山崎先輩が組み立て、貰っただけという事実をここで伏せておいても罰は当たらないだろう。
「へえ」
三人組はボールペン型ビデオの小さなレンズ部分をのぞき込む。屈託なく興味のあるものに目を輝かせる彼女たちは、案外普通で素直なのかもしれない、なんてふと思ったりもする。
影山氏がしきりに時計を気にし始めた。待ち合わせ時間が迫ってきたということか。女性が来たからといってすぐにその女性が浮気相手だと早合点してはいけない。単なる仕事の打ち合わせかもしれないし、影山氏は実は男が好きだっていう可能性だって否定できない。
やがて、ＯＬ風の女性が現れ、影山氏の向かいの席に座る。それに気づいたパンダ三人組は声を潜めて話し始める。
「うわあ、マジやっぱ。ほんまに浮気相手が現れたで」
「超興奮やな」
僕は彼女らに、「もっと普通に声を出して笑って」とかいいながら、影山氏と向かい合わせに座る女性をフレームに納め、写真を数枚撮り、その後はビデオを撮り続けた。
年の頃は二十三、四ぐらいか。女性を見る目がない僕の予想は外れることは多いが、影山氏は三十六歳だから、浮気相手には丁度なのかもしれない。
あとは、二人がこれからどうするのかが問題だ。
今日は木曜だから、明日の夜にでも逢い引きする約束をしているのか、いずれにしても影山氏が自宅に帰るまで尾行を続ければならない。
「君ら、ありがとうな。今日はこれでお終いや」

「えっ、これからやん。まだ続けようよ」
子分一号が膨れ面をする。
「もちろん、尾行は続けるよ。でも、この格好や面子(メンツ)での尾行はここまで。俺は一旦店を出て、サラリーマン風に着替えてくるよ。で、彼らが店を出るときから尾行を開始する。君らは、彼らが出ても気づかないフリをして、このままお茶を続けといて」
「なんか中途半端で嫌やなあ」
「うん、嫌やわ」
「ほんま、ほんま」
彼女らは人を尾行するということに、楽しみを覚えたようだった。本業にするには忍耐力と機転力を求められるが、興味本位でするのなら確かに面白いだろう。
最近では探偵の暴露本とかもよく出版されて、世に蔓延るストーカーもそれらを参考にしていると聞く。全く世も末だ。
「もし、何かあったらここに連絡ちょーだい。もしかしたら力になれるかもしれないから」と僕はパンダに名刺を渡した。
するとパンダは自分の携帯番号を教えてくれた。
「また、こんな機会あったら誘ってね」
そう微笑むパンダはごくごく普通の可愛らしい女子高生に見えた。『情報源は百持て』という鉄則に従うのなら、例え自分の下級生であっても女子高生というなかなか得られない情報源を僕は確保したことになる。いつか調査に役立てばいいな、と僕はありがたく、携帯の番号を自分の携帯に記憶させた。
「早速やけど、もし僕が店の外に出て、五分以内に席を立ちそうになったら、携帯に連絡してくれな」と僕は言いながら立ち上がる。
神妙な顔をして頷く彼女らに軽く微笑みをサービスし、五千円札をもう一枚、テーブルの上に置いた僕は、彼女らに「ありがとうな」と声をかけ、外に出た。
幸い公衆トイレは近くにあり、大便用の個室に入った僕は、リュックからうす黄色のポロシャツと薄茶のスラックス、ランニング

シューズを取り出し、着替えた。探偵たるもの変装道具は常に持ち歩かなければならない。かといって、登山用リュックなどは問題外だが。ここまで苦労しながら、この時間だったら学生服のままの方が返って良かったんじゃないかな、などという至極もっともな意見を黙って僕は飲み下す。

後は整髪料で髪型を生真面目な大学生風にセットし、伊達眼鏡をかける。この間、わずか一分ほど。この間に影山氏たちが店を出てしまっていたらアウトだが、パンダたちからの連絡がないところをみると大丈夫のようだった。

軽く店先の歩道を歩いて、店内を確認する。パンダたちも影山氏もまだ店内にいることを確認した僕は、喫茶店をやりすごし、店の出入り口を観察できる位置に移動し、煙草に火を付けた。

僕の予想では、ホテルに行くなら明日の金曜。今日は明日の妄想で話が弾んでいるだけだろう。女性の方に尾行を切り替え、影山氏の相手を特定することも考えたが、今回の女性が影山氏の浮気相手でなかった場合、ただの無駄骨になる。浮気が続くなら、今後いくらでも調査する機会はあるし、相手の特定までは今回の依頼に入ってなかったなと思いだし、ゆっくりと煙草の煙を宙に吐き出してみる。

視界の端には喫茶店の出入り口が常に入る様に意識して、高架下の携帯ショップやら本屋を漫然と眺める。陽射しはじりじりと暑く、遠くの路面には陽炎が立っているように見える。

「昔は夏が好きだったのに」

独り言が口をついて出てくる。夏に憂鬱さを感じ始めたのはいつ頃だっただろう。親父が滅多に家に帰らなくなってしまうまでは、好物の西瓜にかぶりついていた明るい陽射しの夏休みが僕を取り囲んでいたような気がする。

物思いに耽りながら二本目の煙草に火を付けたとき、視界の端に動きが見えた。

影山氏と女性は、仲良く話ながら喫茶店を出てくる。このまま、

どこかへしけ込むのか、それとも今日はここでお別れか。二人は話をしながら、三宮駅に向かって歩く。僕は暑さにうんざりした大学生を装いつつ、少し距離を縮めることにした。
「じゃあね」
女性が手を振って、阪神電車の階段を下っていく。しばしそれを見送った影山氏は、ＪＲの改札に向かって歩く。今から影山氏が別の女性に会うということはないだろう。当然の事ながら、影山氏の住所や通常の通勤ルートは奥さんから仕入れ済みなので、朝霧（あさぎり）駅までの切符は買ってある。
電車もバスも混んでおり、気づかれずに付いて歩くのは容易だった。バスを降り、住宅街に入ってからは人通りは少なくなってしまったが、ここから再び、行動を始めることはないだろうと、距離をあける。影山氏が、マンションに入っていったのを確認し、今日の僕は任務完了。
事務所に電話連絡を行うと、先輩の吉田美由さんが電話に出た。
「今日は秒殺じゃなかったようね」
僕の声のトーンからか分かったのだろう、少しからかうような口調で美由（みゆ）さんは言った。
「ちょっと女性と喫茶店でお茶してから帰りましたわ。明日が本番かな？」
「金曜だし？」
「うん」
「今日はどうするの？」
「ん？」
「事務所に顔出す？」
「うん。三宮にバイク取りに行くから、帰りに寄るよ」
「じゃあ、晩ご飯食べよっか？」
「オッケー」
携帯を切った僕は、バス停へと向かいながら、煙草に火を付け、漸く日の傾いてきた空に向かって吐き出した。

vol.2

熱い吐息が耳元をくすぐる。僕は四つ年上の美由さんの髪をなで上げる。

美由先輩は、僕がホストの修行を終え、アルバイト探偵として働き始めるとき、エルダーという付きっきりのフォロー役を二ヶ月程度やってくれた人だ。本来エルダーはかなりの経験者に任せるのがこの事務所での常識なのだが、僕の場合、まだ当時二年目だった美由先輩をエルダーに所長が任命した。理由は知らないが、僕にとってはむさいおっさんに手取り足取り教えてもらうより、願ったりかなったりで、夜もパートナーになってくれるなんて、最高に運がいいなあなんて自分の強運を誉めてやりたくもなる。

若い異性の方が、いいところを見せようと張り切って探偵術を学ぼうとするだろうと、もし所長が考えたのなら慧眼だが、ここまでの関係になってしまったのは流石に誤算だっただろうと、当初は考えていたのだが、見かけは茫洋としているながらも、目だけは笑っておらず、常に冷静な観察眼と実行力を兼ね備える所長を見ているうちに、もしかしてこれも計算のうち、なんて弱気な僕も出てきたりする。

美由先輩は、艶やかな黒髪を肩口で斜めに切り落とし、少しほお骨は高いけれども、一重の上がり気味の瞳は涼しげで鋭く、プロポーションも抜群だった。

事の始まりは、二人でカップルを装い、浮気現場のラブホテル付近で張り込みをしていた時だった。

ホテルから少し離れた場所に車を止め、ターゲットが出てくるまでの間、いろんなことを喋り、意気投合していった。ターゲットがホテルから出てくるところを車内から集光タイプの望遠カメラで撮影し、任務終了の連絡を会社に入れてから、そのホテルに二人で

入っていったのは、自然な流れだった。生まれてこの方、彼女が出来ることもなく、キスの経験すら無かった僕なのに、あっさりとそこで童貞を卒業し、二人の関係は、未だに続いているというわけだ。
「翔くん、先に一回出しちゃう？」
美由さんが上目遣いで僕を見る。僕は答える代わりに、美由さんの唇を奪った。

◇

先にシャワーを浴びた美由さんが、バスタオルだけを身にまとい、缶ビールを持ってきてくれた。僕は、トランクス一枚の姿でベッドに腰掛け、深夜のテレビショッピングを見ながら煙草を吸っていたところだった。
軽く缶を打ち合わせ、お互いビールを喉に流し込む。
「今日はどんな感じで尾行したん？」
美由さんが、僕の横に腰掛けながら聞いてくる。
「マリオネットを使った」
「へえ、少しは上達したのね。女の子？」
相変わらず、美由さんの勘は鋭い。
マリオネットとは協力者のことで、今回僕はパンダ三人衆を使うことで、尾行を容易に行うことが出来た、というわけだ。
「女子高生三人組」
「翔くん、ナンパしたの？」
少し小鼻を膨らませ、驚いたように僕を見つめる。「修行」を好評のまま終えたとはいえ、未だに僕はあまり女性に気安く声をかけるのは得意ではない。まあ、女性に限らず、基本的に他人との関係を煩雑に感じる僕は、本当は探偵に向いていないのかもしれない。
しかし、自らが他人と関係を構築していくのは苦手でも、第三者同士がどんな関係を築いていくかを観察したり、分析するのは苦にならないので、案外、天職なのかもしれない、という気もしたり

する。基本的に僕は優柔不断、一つを考えたら他方の可能性も考えずにはいられない屈折した人間なのだ。
「俺だってそれくらいはできるよ。実際、美由さんっていう自慢の彼女もゲットしてるんやで」
ちょっと歯の浮く台詞を言ってみたりする。
「翔くんは私がゲットしたの」
そう言いながら、美由さんは僕の頬に軽くキスをした。
「多分、明日が本番や」
僕は話題を元に戻す。
「金曜だしね」
「うん」
「一人で大丈夫なの？」
「今回一人でってのは、きっと所長が僕を試してるんやと思うねん」
「多分そうよ」
「だから、明日はちゃんと仕事をやり遂げて、そうしたら始めて事務所の仲間になれるって思うんや」
「もう立派な仲間よ」
美由さんはそう言うが、一人前の探偵として所長に認めてもらえないと埋まらない溝というものの存在を僕は感じている。
いつでも、みんなは僕を助けてくれる。でも、まだ誰も僕に助言は求めない。今の事務所の最年少、しかも僕はアルバイト探偵なのだからそれは当然のことだが、頼ってばかりではなんとなく、居心地が悪いのも事実であって、僕は今回の仕事がその転機になるかもしれないと感じていた。
「ありがと」
僕は美由さんに軽く口づけし、帰宅の準備を始める。
「帰るの？」
「うん。今から午後まで寝だめしとくわ」
他の探偵社はともかく、シーク・エージェンシーに出社時間、退社時間などという概念はない。週に何日出勤しなければならないと

いう規則もない。交替しながらとはいえ、数日間連続でターゲットに張り付くこともあるし、ガーボロジーと呼ばれるゴミ調査で、シュレッダーにかけられた書類を復元するのに徹夜するなんて当たり前のことだ。定時出勤、定時退社する探偵なんてものが存在したら、一度はお目にかかりたいものだ。

　といいながら現役高校生の僕の場合、学校の授業が終わらなければ、事務には行けないのも事実ではある。探偵という仕事に興味を持つにつれて、授業を抜け出す機会も多くなったが、ちゃんと出席日数は数えながら行動している。

　高三の夏休みと言えば、受験勉強というのが世の中の常識だけど、一応進学は希望しているものの、勉強に勤しむほど僕は必死に生きてはいない。

　今は夏休みの真っ最中で、存分に使える時間を有意義に僕は過ごしているのだと開き直ることで、なんとなく感じる後ろめたさを宥めている。

「明日もマリオネット？」

　美由さんが訊いてくる。

「さあ、考えてないや。臨機応変に対応しろって僕に教え込んだの、美由さんやん」

「そうね。頑張ってね」

「うん」

　そう言った僕は自宅に帰ることにした。

vol. 3

三日目の張り込みは、少し早めの時間から開始した。まさか会社を早めに退社してまで逢い引きするとは思えないが、そういう先入観こそが探偵にとっては命取りになる。

いつもの所にバイクを停め、今日はジーンズにTシャツというラフな格好で待つことにする。

ズボンのポケットに入れておいた携帯が震える。中上さんからだった。

「影山氏の奥さんから連絡があった。影山氏は今日は接待で遅くなると言って家を出たらしい」

中上さんは、三十代前半ではあるけれど、穏やかな人柄のため、気軽に話ができる先輩だ。「側調（そくちょう）」という、ターゲットの周囲の人には直接当たらず、役所、金融機関などのデータから調査を行うのを得意としている。この方法は相手にばれる心配が少ないため、慎重さが要求される調査によく使われる。

「それってマジっすかね」

「さあな、アリバイ工作かもしれんしな」

「接待が嘘なら、今日がビンゴっすね」

「そうなるな。ま、焦らず頑張れや」

そう言って、中上さんは電話を切った。

少し気合いが入ってくる。本当に接待なら調査を切り上げてもいいが、案外早く接待は終わり、その後影山氏が女性と会うという可能性も捨てきれない以上、付き合わなければならない。いずれにしても、昨日のようにはいかないぞ、と呟きながら僕は煙草に火を付けた。

午後も六時を回った頃、そろそろ会社の出入り口に意識をさらに集中させようと、煙草を靴で揉み消したとき、僕のその靴の上に

人の影が差し込んだ。
ふと顔を上げると、そこにはセーラー服を着た女子高生が立って僕をじっと眺めている。昨日のパンダ達と同じ制服ということは恐らく僕の後輩ではあるのは間違いないのだろうが、きちんと制服を着て、ショートの黒髪はまっすぐで、顔には化粧気もない。日焼けサロンでの不健康な茶色の肌ではなく、色も白く、黒目がちの目元は軽く上がり目で、口元は意志が固そうに結ばれている。少し怜悧とでも言うべき表情はきりっとしていて化粧映えするに違いない。
同じ制服を着ているのに、ここまで昨日のパンダたちと印象が違うのは神様の悪い冗談としか思えない。
生徒会長的と言えば、的確な表現になるだろうか。
数年経てば相当な美人になるだろうと誰しも確信するであろう少女にじっと見つめられていることに気づいた僕は、一瞬でも影山氏のことを忘れてしまっていたことに気づき、慌てて会社の出入り口に視線を戻す。
じっと眺められていることに居心地の悪さを感じながら、影山氏が出てくるのを待つ。年上の女性に憧れる僕であっても、こんな可愛い子に見つめられては心拍数も跳ね上がる。愛想の一つでも振りまいてお近づきになれるものならなりたいが、新人アルバイト探偵にそこまでの余裕はなく、少し情けない気持ちにもなってくる。
「仕事中、ですか？」
緊張からか、少し堅い口調の少女の声は、雑踏の中を通しても僕の耳にすんなり入ってくる。
「え、ああ」
不意に声をかけられても、僕は会社から目は離さなかった。少し自分を誉めてやる。
「頼子（よりこ）たちから聞きました」
「誰それ？」
「友達」
「で、何を聞いたん？」

「ここに来れば探偵さんがいるって」
そういえば、昨日携帯の番号を交換したパンダのリーダーの名前は、多嶋(たじま)頼子という名前だったかと思い出す。どう考えてもパンダ達とこの子が友達だとは信じられないが、そもそも女子という生き物を理解できていない僕に、彼女たちの友達という定義が理解できるはずもなかった。
影山氏が会社から出てくる。
昨日の女性と一緒だ。
ということは社内不倫か。
回りに他の社員が見あたらないから、今からどこかの接待に行くというのは疑わしい。三宮駅方面に二人で笑顔で話ながら向かっていく。影山氏達が信号待ちで止まったとき、僕は始めて声をかけてきた少女を真正面から見た。
「なんで、夏休みなのにセーラー服なん？」
僕は興味本位で聞いてみた。
「補習とか部活とか・・・」
きょとんとした顔もこう整いすぎては嫌味になるが、あどけなさがそれを和らげる。
部活でも文学系なら学生服来て学校に行かなきゃいかんのかあ、といつもジャージ姿で部活に参加していた僕は妙に感心したりもする。納得がいったので、話を続けることにした。
「なんで、俺が頼子ちゃんの言う探偵だって分かったん？」
「背が高くて、格好良い人って聞いたから」
そういう彼女の口元がほころび、少し笑顔になる。逆に格好良いなんて言われてしまった僕は、それを言ったのが頼子ちゃんであることも忘れ、急にドキドキし始めた。
「あ、そうなんや」
我ながら情けなくもしどろもどろになり、頬が紅潮しているのを自覚する。
「探偵さんって、人探しもしてくれるんでしょ？」

「そりゃ、勿論」
それが仕事だと言い切ってもいいくらいだ。
「料金は高いんですか？」
少し不安げな表情をする。その表情に妙に艶めかしさを感じてしまう僕は背中に嫌な汗が噴き出てくるのを感じた。
「期間によるけど・・・。うちの事務所の場合、成功報酬制やから、最初に着手金として二十万ほどと、あとは必要経費を払ってもらうくらいかな」
「そうなんだ」
彼女の表情に安堵の色を見て取った僕は慌てて付け加える。
「でも、見つからなければ、それだけで済むけど、見つかったら当然報酬払ってもらうわけだから、トータルでは百万近くになっちゃう場合もあるよ」
「取りあえずは二十万、ですか・・・」
「うん。誰を探すのか知らないけど、小遣いでなんとかなるもんじゃないなあ」
「そのくらいは持ってます」
彼女は毅然と言ってのける。
僕がアルバイトを始める前は、せいぜい月に五千円程度の小遣いだったのに、などと思うが、最近の女子高生なら稼ぐ方法はいくらでもある。彼女がいかがわしいバイトでもしているとは思いたくないという妙に純情な自分がいるのを自覚はするが、持っているというからには、方法はどうであれ、お金は持っているのだろう。二十万円をそのくらいと一言で片づける彼女が少し羨ましい。
「誰を探して欲しいの？」
「お兄ちゃんを・・・」
「なら先ずはご両親に相談すべきやない？」
「お父さんもお母さんも、もう諦めてます」
「諦める？」
少女はじっと僕をみつけるように見つめる。

「じゃあ、警察・・・」という僕の逃げ腰な声に覆い被さるように少女は言った。
「うちの両親は、もうお兄ちゃんのことなんか忘れろ、なんて言うんです」
「それはちょっと酷いよなあ」
唯ならぬ少女の剣幕に少したじろぎながら僕は答える。
何かややこしい事情があるに違いない。さて、それならうちの事務所に一度来てもらった方がいいよなあ、などと考えているとき、再び少女が声を出す。
「あの・・・」
「うん？」
「信号変わってますよ」
「えっ」
慌てて影山氏を捜すが、見あたらない。折角のチャンスをふいにしてしまった現実に膝から下の力が抜けていく。またしても、尾行失敗。所長になんと報告すれば良いのだろう。女子高生は僕の天敵なのだろうか。
「でも、新たな依頼一件調達してきましたよ」
とか言ったところで、所長のことだ、眉一つ動かさず、僕は領収書等を整理する事務屋に転属させられてしまうかもしれない。少女のことを恨めしく思うのはお門違いで、これは僕の完全なミス。しかし、絶望の淵へ落とし込んだのも彼女なら、救ってくれたのも彼女だった。
「多分、探偵さんが探してた人たち、あそこのコンビニに入っていったよ」
「ほんまかっ」
抜けていた力が蘇ってくる。目を凝らし、コンビニの中を窺うと、確かに影山氏とその連れの女性はコンビニの中にいた。今度は安心で力が抜ける。
「ありがとう」

流石に今度は影山氏に視線を固定したまま、彼女に礼を言う。
「いいえ」
そう言う彼女は少し笑ったようだった。決まりの悪さを隠すため、煙草に火を付けているうちに一つの疑問が過ぎってくる。
「なんで、俺が探してるのがあの人たちだって分かったの？」
「頼子から写メみせてもらったし」
彼女は笑う。
『おとなしくしてろよ』と言ったのにパンダ三人衆は、影山氏らの写真をこっそり撮ったのだろう。確かに学校でのいい自慢話にはなるわな、と苦笑する。
「ほんま、助かったよ」
「あの・・・」
「ん？　お兄さんを探すって話？」
「はい」
「一度事務所においでよ。うちはきっと警察より頼りになるで」
そう言いながら僕は財布から名刺を一枚取り出し、彼女に渡した。
先ほどは警察に行けばいい、と逃げようとしていたのに、いつの間にやら商売熱心になっている自分がどこか可笑しい。
「小鳥遊翔平さん？」
「そう。君の名前は？」
彼女は僕の問いには答えず、少し戸惑った様子で僕を見ている。
「あの・・・。」
「ん？」
「もしかしてサッカー部の小鳥遊先輩ですか？」
しまった、と今更ながらに名刺を渡した自分を恨めしく思う。同じ高校なら、弱小サッカー部であったとしても、僕のことを知っている可能性は否定できない。
「後輩なの？」
「はい」
「何年？」

「二年生です」
「俺がサッカー部にいたってに知ってるの？」
「うん」
「なんで？」
「なんか、いつもやたら遠くにボールを蹴っているひょろ高い人がいるなあって」
「もしかして下手なの、目立ってた？」
「そんなことないよ」
彼女は軽く笑う。一見冷たそうに見える表情も笑うと年相応にあどけなさを見て取ることができ、漸く僕も気安さを感じ始める。
「良かった。でも、もう元サッカー部やけどね」
「部活辞めたんですか？」
「うん」
そう答えて、あとで大事なことを付け加える。
「あの、このバイトのことは内緒にしててもらっていいかな？」
僕は、頼み込む。「ちょっと退学はマズいでしょ」などと脳裏に過ぎる。
「朱（しゅ）・・・静蕾（じんれい）」
それには答えず、彼女は名前を名乗った。
「ジンレイ？」
「はい」
「中国の人？」
「在日です」
「ああ」
確かにすぐ近くには中華街があり、華僑はこの辺では珍しくはない。
神戸中華街は横浜中華街、長崎新地中華街とともに日本三大チャイナタウンの一つに数えられ、東西約二百メートル、南北百十メートルの範囲に百近くの店舗が軒を連ねる。美由さんの行きつけの中華料理店もあり、よく連れていってもらっている。

「ちゃんと依頼する前に、少し相談させて欲しいんです」
それはそうだろう。
二十万円もの大金を彼女が出すというなら、それを決心するために、うちの事務所の調査の方法とかをこっちもちゃんと説明する義務がある。彼女の両親が兄探しに消極的というのも気になるところだ。
「いいよ。明日にでも連絡くれれば、時間取れるよ」
「急ぐんです」
静蕾は切羽詰まった声を出す。
「できれば、今日にでも、今すぐにでも聞いて欲しいんです。でないと煙草吸ってたことや、先輩のバイトのこと学校に言っちゃいますよ」
明らかに僕の方が不利だ。
下級生に脅されているのが情けない。
とはいえ、彼女なりに必死であることは声からもひしひし伝わってくる。しかし、僕は現在仕事中だ。影山氏が女性と連れだってコンビニに入っていることからも、今日は接待なんかではないと判断できるし、奥さんに言った『接待で遅くなる』という言葉は単なるアリバイ工作で間違いない。となると、浮気をするなら今晩ということで、必然的に僕は影山氏たちを尾行し、ホテル前で待ち伏せし、二人が出てくるところをカメラに納めなければならない。
確かにホテル前で出待ちをしている間は話も聞けるだろうが、セーラー服姿の少女とホテル街にいたら、彼女がマリオネットになり得るわけがない。ものすごく目立つのは必至で、運が悪ければ青少年育成条例違反か何かで僕が警察に捕まってしまうだろう。そんなことを考えているうちに、影山氏たちがコンビニから出てくる。
「そんなこと言われても、今すぐにってのは無理だよ。見ての通り仕事中だし」
僕がそう言っている時に、影山氏はタクシーを呼び止めた。てっきり北野の洒落たホテル街に行くのだろうと思っていた僕は、慌て

てバイクに駆け寄る。ヘルメットを被り、エンジンをスタートさせる。直列四気筒の排気音が心地よい。静蕾のことは気になるが、ここは仕方がない。

「事務所に電話して」と言い残し、発進させようとしたとき、リアシートが沈み、後部座席に乗った静蕾が僕のウエストに手を回してきた。

影山氏たちの乗ったタクシーが動き始める。

静蕾を振り落とすことは出来ないと観念した僕は、予備のヘルメットを取り外し、静蕾に渡す。静蕾は僕の意図を理解して、急いでヘルメットを被る。

「ありがと。先輩」

「振り落とされるなよ」

エンジン音に負けないように怒鳴りながら僕はバイクを発進させた。

タクシーは生田新道（いくたしんみち）を通り、兵庫県庁の前を通り過ぎ西へ向かっている。僕は頭の地図を広げてみる。北野でなく、西へ向かうということは新開地（しんかいち）にでも行くのかな、と想像する。予想どおり、湊川（みなとがわ）公園の交差点を左折し、新開地方面に向かっていく。

新開地は、神戸市兵庫区南部に位置し、戦前から昭和三十年代半ばにおいて神戸の中心的市街地であり、映画館や飲食店を中心とした神戸一の繁華街でありオフィス街でもあった。娯楽の中心が映画でなくなったことや神戸市役所が三宮に移った事により、神戸市の中心も三宮に集約されて街は徐々に寂れていったとはいえ、今でも歓楽街の趣のある街だ。当然、ホテルもそこかしこに乱立している。

タクシーが停まった。

タクシーを降りた影山氏たちは、コンビニ袋を手に提げ、ホテルを物色するわけでもなく、まっすぐ歩道を歩いていく。コンビニ袋には弁当でも入っているのだろうか。豪華な夕食、と行かないところにサラリーマンの哀愁を感じてしまう。いつも決まったホテルを利用しているのなら、迷わずそのホテルに向かっていくだろう。

実際、影山氏たちは周りを見回すこともなく、既に二人だけの世界に入り込んでいるようだった。　僕たちは停まったタクシーを追い越し、歩いていく影山氏達の横も通り抜け、少し先にある細い路地に入ってバイクを停めた。
　エンジンを切り、僕たちがヘルメットを脱いだ時、ちょうど僕たちのいる路地の前の歩道を影山氏たちが通り過ぎた。少し間を空け、尾行を続けることにする。
「着替えとか、持ってないよね？」
　歩きながら僕は静蕾に尋ねる。
「うん」
「目立っちゃうなあ」
「え？」
　不思議そうに静蕾は僕を見上げる。
「だって、ここってホテル街やん。実際、俺はホテルに行こうとしてるターゲットを尾行してるわけだし。セーラー服はねえ・・・」
「あっ」
　静蕾は自分の姿を見下ろす。
「取りあえず、二人がホテルに入るのを見届けたら、服でも買うか？」
「でも、私、今日はそんなにお金持ってないわ」
「心配せんでも、俺が払うよ。ただし、安物しか買わへんからな」
　僕の言葉に静蕾は少し笑う。
「ごめんね」
「なにが？」
「無理矢理付いて来ちゃって」
「ほんまやわ。無茶するよなあ」
　今度は二人同時に笑う。
　影山氏たちが手を繋ぎ、『ヴェルベット』という名のホテルに入ったのを見届けた僕たちは、ホテルの前をいったん通り過ぎ、湊川商店街に向かって歩き始めた。

少なくとも二時間以上、コンビニ袋に入っていたのが今日の夕食ならそれ以上、影山氏たちがホテルから出てくる可能性は低く、その間に静蕾の服を調達しようと考えたのだ。
「話は短時間で済む？」
「わからない。でも、どうして？」
「ターゲットがホテルから出てくるまでにはまだ充分時間もあるやろう。俺の張り込みなんかに付き合わなくても話は聞けるよ」
「でも、ちょっと先輩の仕事にも興味あるわ」
静蕾の表情は既に穏やかで、僕のバイクに飛び乗った悲壮（ひそう）さはもう影を潜めている。
そんなことより僕のアルバイトに興味を寄せ初めてさえいる。一歳しか離れてないのに気分の切り替えが早いのはそれでも僕より若いからなのか、彼女の元々の性格なのか。年甲斐もなく、夏の暑さに憂鬱さを感じる僕には、その感情の変化の早さに羨望と苛立ちの両方を感じてしまう。
「ターゲットはなかなかホテルから出てこない可能性だってある。そしたら帰るのすごく遅くなるよ。親だって心配するだろう？」
「そんなこと無いよ」
再び静蕾の表情が強張る。これ以上静蕾を帰らす努力をするのを億劫に感じた僕は、『カジュカジュ』という婦人服の店に静蕾を連れて入る。
「少し大人びた服を選んでくれよ」
と言いながら、そういえば美由さんに服などプレゼントしたことも無いなあと、少し罪悪感にも似た気持ちが沸き起こった。
「これなんてどう？」
などと楽しげに色んな服を僕の前に掲げてみせる静蕾に適当に相づちを打ちながら、手元のブラウスの値札を観た僕は、予想外の金額に少し狼狽する。
これも影山氏の調査の必要経費で落とせるかなあなんて思ったりもするが、経理の坂田さんはそこらへんのチェックが厳しいのを

思い出す。
　縁なしの眼鏡をきらりと光らせ、冷たい一瞥を僕にくれ、「こんなの必要経費って請求できるわけないでしょ」と軽くあしらわれている僕が容易に想像できて、思わずため息が漏れる。確かに影山氏の調査の請求書に女物の服代が含まれていれば、影山氏の奥さんだって不審に思うだろうし、うちの事務所の看板にも傷がつく。
「先輩っ」
　と静蕾が試着室から顔をのぞかせ僕を呼ぶ。
「へえ」
　思わず感嘆の声が出る。
　白いブラウスに灰色のチェックの柄のタイトなスカートを穿いた静蕾は、どこからどう見ても仕事のできるＯＬだ。
「どう？」
「完璧。って、化粧までしたんか？」
　見れば、静蕾は艶やかなルージュの口紅にアイラインまでしている。化粧映えすると思った僕の勘に狂いはなかった。それにしても、女子高生の学生鞄の中には一体何が入っているのか。一度確認させてもらいたいものだ。
「これからどうするの？」
　支払いを済ませた僕に、静蕾は尋ねてくる。
「とりあえずパンでも囓りながら、『ヴェルベット』の出入り口をうまく撮影できる場所を探す」
「それで？」
「あとはひたすら待つ。誰かが通りかかれば、ホテルに入ろうかどうしろうかと迷ってるカップルを装うことになる」
「やっぱりそういうフリって難しい？」
「小声でぼそぼそ話してるだけでいい。だからその間にでも、朱さんの話を訊こうかな」
「静蕾って呼んで」
「わかった。じゃあ、俺も翔平って呼んでもらっていいよ」

◇

僕たちはコンビニでサンドイッチと珈琲を買い、食べながら『ヴェルベット』の方へ向かって行った。日はすっかり落ち、街灯もあまりない細く薄暗い路地に、ホテルの入り口からこぼれる光が眩しい。近くにこの入り口を見張れるような喫茶店などがあるわけもなく、既に明かりのない雑居ビルの階段に腰掛け、僕はカメラを設置する。この位置ならば、万が一、影山氏たちがホテルから出てきたときにあたりを見回したとしても、気づかれることはないだろう。静蕾は興味深げにカメラを弄る僕の手元を眺めている。

「さて」

カメラのピントもホテルの出入り口に合わせ、いつ影山氏が出てきてもシャッターを押せるように視線を固定させたまま、僕は呟いた。

静蕾が僕の声に反応し、僕の横顔に視線を向けたのが分かる。

「静蕾の話を訊かせてもらおうかな？」

少しの間、沈黙が流れる。

「ところで、シーク・エージェンシーのこと、どこまで知ってるの？」

僕は尋ねる。

「どうして？」

静蕾がはっと口元に手をやるのが気配で分かる。

「頼子ちゃんたちの話で探偵を見ようと思って興味本位でセンター街に来たというのなら話は分かる。でも、君は兄さんを探して欲しいとうちに調査を依頼しようとしている」

「うん」

「一般人にとって、人を探してもらうなら、まず行くところは警察や」

「でも・・・」

「警察にはもう行ったのかもしれないし、行けない事情でもあるのかもしれないけど、それはまだ俺は知らない。でも、信用できるかどうかすら分からない探偵事務所の、しかも始めて会った探偵にいきなり調査を依頼するほど間抜けには君は見えない」
「体育会系だし、もうちょっとお馬鹿かなって思っていたのに」
「はあ？」
思わず僕は脱力する。
「先輩って案外凄いやん」
静蕾の声が弾む。
「『案外』は余計」
「はぁい。本当に翔平さんって呼んでいいんですかぁ」
静蕾は急に馴れ馴れしくなり、逆に僕の方が戸惑ってしまう。
「ああ、いいよ」
「なんか嬉しい」
そんな台詞にコホンと咳をするフリをして僕は続けた。
「バイクにまで飛び乗ってくる無茶をしてまで、付いてくるんや。絶対にうちに依頼しようとしている。それもかなり切羽詰まった状況やってことぐらい分からなくて、探偵なんかできへんわ」
軽口を装い、そうは言ってみたものの、僕の予想が的中し、少し僕の中に戸惑いと不安が生じる。
確かに垣内所長の手腕は業界の中では際だっているが、一般人がそのうわさに飛びついてすぐに依頼ということはまず無いと言って良い。依頼者というものは、調査を依頼する前に一度は事務所を訪れ、事務所の雰囲気や所長や対応した者の態度、調査費用、調査方法などを確認して、そしてそれから本当に調査を任せて良いのかどうか、相当迷うものなのだ。
僕がシーク・エージェンシーの探偵であることは、頼子から聞けば、静蕾は知ることが出来る。でも、その翌日に依頼を持ち込むのであれば、誰かからシーク・エージェンシーのことを聞いていたか、少なくともうちの知識を持っていたことになる。所長が手がけ

るほどの厄介な事案になるかもしれないな、と僕の中で嫌な予感が背中を這い上がる。
「やっぱりお爺ちゃんの言うことは当たってるるわ」
　静蕾はそう言って一人で納得している。
「お爺ちゃん？」
「そう。私のお爺ちゃんは、翔平さんの事務所の所長知ってるの」
「そうなん？」
「確か垣内って人だったよね？」
「うん」
　静蕾のお爺さんがどんな人で何をしているのか全く知らないが、垣内所長なら日本人以外の華僑の人たちのネットワークを情報源としていても不思議はない。
「お爺ちゃんが、あそこの探偵は優秀だ。なにせ、あの垣内が鍛えてるんだから、って言っていたのを覚えてたの」
「それで、俺がシーク・エージェンシーの探偵だと分かって、ついてきたのか？」
「そう」
「でも、所長を知ってるなら、こんな回りくどいことをしなくても、直接所長に話をすればいいんやないか？」
　ここで、静蕾の雰囲気が変わる。
　少し困惑しているような感じで、居心地が悪そうに座る位置をずらす。僕は静蕾の表情を確認したいのだが、ヴェルベットから目を離すわけにもいかず、静蕾のかすかに変わった息づかいを感じ取る。
「お爺ちゃんは、今回のお兄ちゃんの行方不明に心当たりがあるようなの」
「じゃあ、お爺さんに訊けばいいやん」
「今回は、『儂に任せろ、心配するな』って言うの。お父さんもお母さんもお爺ちゃんには逆らえないし・・・」
「なら、うちに頼むことはない。お爺さんに任せた方がいいんやな

いか？」
「お兄ちゃんのことなのよ。じっと待ってるなんてできへんよ」
「でも、うちの事務所で調査するなら所長も当然知ることになるし、お爺さんの耳にも入るだろう」
　静蕾が僕の横顔に視線を向けたのが分かる。
「そうか・・・。それで俺なんや」
　静蕾は何も言わない。
「俺に所長に黙って、一人で調査しろってことなんや。それで、うちの事務所には行かず、無理矢理僕についてきたんやな？」
「できない？」
「普通に考えたらできないな」
「どうして？」
「今回俺は簡単な尾行だから、一人で調査してるけど、俺はまだ新入りというか、実際アルバイト探偵で、知識も技術も十分やない」
「でも・・・」
「それに人探しは本来色んな方面からアプローチする必要があるし、チームで行う仕事や」
「翔平さんだけでは無理なの？」
「自信は無い」
　僕はきっぱり言った。事務所に内緒で調査を行うというのにも抵抗もあるし、第一、僕は今回初めて一人で調査を任されたひよっこなのだ。
「そんな」
　静蕾は黙り込む。
「考えてもみてくれ。静蕾の兄さんが行方不明になった。それは、自分の意志なのか、そうでないのか？」
「それは・・・」
「自分の意志で姿を消したのなら、自分の痕跡はできるだけ残さないようにしているはずや。自分の意志ではない場合、何らかの痕跡は残ってるだろうが、その場合、事件性があることになる」

「・・・うん」
横目で静蕾の表情を確認しようとするが、暗くて表情は窺えない。彼女の祖父が自分に任せろと言ったからには、何か手を打っているのだろう。そんな状態で僕に何をどこまでできるか分からないが、僕はもう一度静蕾の笑顔が見たくなっていた。
「兄さんのこと、話してくれ」
「やってくれるの？」
「君が急いでいるのは分かるけど、所長に内緒にするならほかの仕事との掛け持ちになる。それに俺は新人だ。どこまでできるか保証はできへんよ」
いきなり静蕾が僕に抱きついてくる。
「ありがとう」
耳元で、静蕾が呟く。そのこそばゆい感覚を心地よいと感じた僕は、少し美由さんに罪悪感を覚えてしまった。
元の位置にゆっくり戻って座った静蕾は、僕に兄のことを話し始めた。
「お兄ちゃんは、お爺ちゃんのやっている貿易会社で働いてたの。中国からの商品の輸入の担当者でよく中国にも出張してたわ」
「貿易会社で働いていた、ということは今は違うの？」
「数ヶ月前、いつもどおり中国から帰ってきたお兄ちゃんは少し様子が変わっていたわ」
「それで」
「お兄ちゃんは会社を辞めたの。お爺ちゃんもいずれは跡継ぎにって考えていたはずで、お父さんもお母さんも随分反対したわ」
「まあ、社会人になれば色々あるだろうし、合う仕事、合わない仕事っていうのも・・・」
「違うわ」
静蕾は僕が言い終わらない内に僕の言葉を否定する。
「お兄ちゃんは帰化したの」
「キカ？」

「日本人になったのよ」
「別に悪いことではないと思うけど」
「別に帰化することが悪いことではないの。華僑は例えば朝鮮の人たちと違って、居住地の国籍を取ることに寛容だわ。でも・・・」
「でも？」
「お兄ちゃんは自分が中国人であることに誇りを持っていた。帰化しても自分の名前まで変える必要ないのに、日本名まで申請して・・・」
日本人であることを特に卑下はしないが、だからといって日本人であることにプライドを持つこともできない僕にとって静蕾の言葉は少し違和感があり、飲み込むのに苦労する。
確かに仕事の関係上、海外へ行くことが多い場合、中国籍を持っていることが不便というケースもあるだろう。例えばアメリカへ行くと入国管理官からいろいろと聞かれるだろうし、ビザを毎回取らないとだめであったりとか不自由も多いと聞いたことがある。仕事の関係で海外への出張が多い場合、その不自由を解消するために帰化する華僑もいると聞いたこともある。
しかし、静蕾の兄はその会社を辞めて帰化したという。帰化には何か特別な理由があったのだろうか、そしてそれが今回の失踪に関係しているのだろうか。僕の頭の中で色んな疑問が湧いてきては膨らみ、許容範囲の狭い僕の脳を圧迫する。
「日本で暮らすのなら、日本人になってしまった方が楽なこともあるやろう」
「でも・・・」
「で、兄さんの名前は？」
「朱銘傑（しゅみんちぇ）。今は金田尚貴《かねだなおき》よ」
「日本に帰化して、日本名まで取得した兄さんを君がどう思おうが、それは勝手や。君が日本人に偏見を持っていたり、日本人に帰化したくないと思うのも自由。それより、その後の兄さんの行動を教えてくれ」

静蕾の表情を確認し、静蕾の気持ちを考えて話を訊きたい欲求に駆られるが、あえて僕は冷たく問いを続ける。感情に縛られていては大事なことを見失う。『冷静さを失うことは、事実を把握する機会を永遠に失うことだ』という所長の言葉を思い出す。
「お兄ちゃんは日本の会社に再就職したわ」
「ほう。何ていう会社？」
「グローバル商事。私たち華僑と何の関係も無い会社よ」
「日本に帰化して、日本の会社に再就職。普通に考えて、別におかしいところはないやんか」
「でも、お兄ちゃんは帰化した頃から、様子が変わってしまったの」
「具体的には？」
「私にとってお兄ちゃんは優しく頼りがいのある人だったの。いつもニコニコ笑って。それが・・・」
「それが？」
「笑わなくなったわ」
「ふむ」
「一人で難しい顔をしていることが多くなって、私たち家族に隠れてよくどこかに電話するようにもなった」
「そしてある日失踪した？」
「そう」
「日本の会社には馴染めなかったとか？」
「その会社に再就職する前から、様子はおかしかったわ」
「静蕾の感覚では、兄さんは何か事件に巻き込まれたんやと思うの？」
「分からない」
「最後の中国への出張で、君の兄さんに何かあったんじゃ？」
「そうかもしれないけど・・・」
「静蕾の兄さんがいなくなって、その会社の人から何か連絡は？」
「『出社してこないけど、どうしたのか』っていう電話がかかってたわ」

「それだけ？」
「二、三回、会社の人が私の家に来たわ。お兄ちゃんが帰化した人物であることも、その時初めてて知ったみたい。うちは『朱』としか表札出してないしね。それを見て、なんだか動揺してる感じだったわ」
「動揺？」
「三回目に会社の人が来たときは、ちょっと怖そうな感じの人で、本当に居場所を知らないのか、なんて脅かすような口調で言ってたし・・・」
　雇った社員が急にいなくなれば、自宅を訪ねてくることもあるだろう。しかし、社員が帰化した人間であるかといって動揺するものだろうか。強面（こわもて）の人間が半ば脅すように居場所を聞き出そうとするところを見れば、静蕾の兄は横領でもしたのだろうか。分からないことだらけで、どこから静蕾の兄探しを始めれば良いのか見当もつかない。
「怖そうな感じの人・・・。静蕾の兄さんは会社で問題でも起こしたのかな？　例えば横領とか？」
　わざと軽い口調で言ってみたが、静蕾の反応は素早くそして激しかった。
「お兄ちゃんがそんなことするわけないじゃない。お兄ちゃんは真面目が服着てるような人だったんよ」
「ごめん。でも、それだけじゃ、どこから手を付けていいのか分からないよ」
「うん」
「静蕾のお爺さんはある程度何かを知ってるんやね？」
「きっとそう」
　横領をしてしまった孫を匿う祖父というイメージが頭の中を過ぎり、慌ててそれをうち消そうとしてみる。
　人が姿を消すことは決して珍しいことではない。自分探しの旅に出ることだってあるかもしれないし、当然事故やら事件に巻き込

まれることもあるだろう。人一人消えることくらい日常茶飯事で、それでも僕たち探偵は、当人たちの都合にお構いなく、周辺を嗅ぎ回る。

「兄さんが中国でどんな体験をして、人が変わってしまったのか・・・。それも重要な手がかりにはなると思うけど、それは俺には調べきれない。とりあえず、そのグローバル商事から調べてみるよ」

「いいの？」

「あまり期待はして欲しくないのが本音やけどね。美人の頼みは断っちゃいかんというのが俺の爺ちゃんの遺言や」

「ほんま？」

「うそ」

「もう・・・」

表情は確認しなくても、静蕾の雰囲気が柔らかくなったのは感じ取れる。明日から忙しくなるな、という思いは意外にも僕を憂鬱にさせることはなく、蒸し暑い空気も案外悪くない。きっとこれは静蕾の影響で、僕は確実に単純な脳細胞の持ち主であると体調がそれを証明している。

「あっ・・・」

静蕾が呟く。

当然ヴェルベットから視線を外していない僕は、出てきたカップルが影山氏たちであるのに気づくと同時に写真を撮り始める。ホテルの出入り口の明かりが二人の姿を映し出し、思いっきりの笑顔の証拠写真が手に入る。これで仕事は完了だ。

「さて」

「うん」

「俺の仕事は終わったよ」

「意外とあっけないのね」

「俺らの仕事の大半は待機や。じっと耐えてターゲットに張り付く。それでも、成功するかしないかの分け目はほんの二、三秒で決まってしまう」

「うん」
「帰ろうか。送るよ」
僕と静蕾は、ゆっくりとバイクの停めてある路地に向かって歩く。
夜も十一時近くになると人通りはなく、道路にも数台のタクシーがまばらに停まっているだけで、がらんとした風景が目に入ってくる。人や車がいないだけで、風景は急に人工的な廃墟となったように思えてしまう。
静蕾のこともあってか、不思議と単独での初仕事の成功に高揚感は無く、空虚な気持ちで僕は煙草に火を付ける。
「私にもちょうだい」
そういう静蕾に煙草を差し出し、ライターで火を付けてやる。じりじりと煙草の先端が焦げていく。僕はライターを消し、静蕾に声をかける。
「無理に大人ぶる必要はない」
「えっ？」
「煙草、吸ったことないんやろ？　煙草は息を吸い込まなきゃ火がつかない」
照れくさそうに静蕾が笑う。
高校生ともなれば、煙草も吸い、酒も飲み、売春だってやっている奴も珍しくないだろう。そんな中で煙草の吸い方も知らない静蕾にふと可笑しさといじらしさを覚えてしまう。
バイクを停めてある場所に辿り着き、僕は静蕾にヘルメットを渡す。
「中華街？」
「まさか」
「えっ、どこなん？」
「中華街は商売の場所よ。私たちは大体、北野の方に住んでるわ」
「知らんかった。ま、取りあえず北野方面に行くわ。北野に入ったら一回停めて、道を確認するから」
「うん」

静蕾は既にヘルメットを被っている。華奢な体に大きなヘルメットのシルエットはまるでマッチ棒だな、と可笑しくもない冗談が頭の片隅を駆けてゆく。

ポケットからバイクのキーを取り出そうとしたときだった。

バイクを停めてある路地から大通りに面した所に白いバンが停まる。まるで僕たちを通せんぼするかのように停まった車にふと嫌な予感を感じ、首の後ろの毛が逆立つ感覚がする。

「翔平さんっ」

その時、静蕾の悲鳴が聞こえた。

僕が前方のバンに気を取られているうちに、路地の奥から誰かが静蕾を羽交い締めにしている。

体が反射的に動き、静蕾を羽交い締めにしている人物に体当たりしていく。その人物は思っていた以上に大柄だが敏捷で、僕が体当たりする前に脇腹に衝撃が走る。

回し蹴りをくらったようだ。僕は路地の端に吹っ飛ばされる。

息が詰まるが、耐えて立ち上がる。

男は目出し帽を被っていて顔は確認できない。少なくとも百九十センチ以上はあるだろう。静蕾は口をふさがれ、くぐもった声をあげながら手足を必死で動かしている。目は恐怖に見開かれ、僕に救いを求めている。僕が半ば自棄気味にそれでも必死で静蕾を助けるために駆け出そうとしたときだった。

背後でバチッと音がして首の後ろに熱いものを押しつけられたような感覚がして膝から力が抜ける。白いバンに乗っていた奴もグルだとすれば、当然他にも人がいるはずだった。恐らくスタンガンだろう。すぐに失神してしまわなかったのは、スタンガンの調整が狂っていたのか、僕の抵抗力が思いの外強かったのか。

意識が遠のきそうになるを必死で押し止め、背後の人間につかみかかる。同じく目出し帽を被った人物が身構えるのにも構わず突進する。僕の突進をかわそうと脇に飛び退こうとしたとき、僕の指が目出し帽に引っかかる。目出し帽から出た髪は、薄暗い中でも赤

っぽい色だと分かった。驚いて振り向いた顔は日本人のものではなかった。

「外人・・・？」

朦朧としながらも顔を脳裏に焼き付ける。その時、再び背後から衝撃がきた。静蕾を攫おうとしているのはもう一人いたのか、と思ったとき、僕の意識は暗転した。

vol. 4

頭痛と吐き気で目が覚める。口の中もなんだか痺れているような違和感があり、早速僕は憂鬱になる。ぼんやりと周りを見回し、自分が公園のベンチで寝ていたことに気づく。無意識に煙草を取り出し、火を付ける。ズキッとした頭の痛みに昨晩のことを思い出し、僕は慌てて立ち上がった。

「静蕾・・・」

思わず呟く。

静蕾を攫って行ったのは、一体何者なのだろう。

スタンガンまで用意してあっという間に静蕾を連れ去る手口はそこら辺にたむろする不良少年どものものではなく、プロのような気がする。それに奴ら全員がそうであるかどうかは知らないが、少なくとも一人は白人だった。もしプロなら、彼らは僕と静蕾をずっと尾行していたことになる。新人のアルバイトとはいえ尾行のプロを自認する探偵が、尾行されていたとは間抜けな話だ。

静蕾が攫われたのはもしかすると失踪した静蕾の兄さんと関係があるのかもしれない、と考えてみる。しかし、昨晩聞いた静蕾の話に白人は関係ない。それとも僕はあの白人に拘りすぎているのだろうか。

そこでふと自分がいるのが湊川公園であることに気づく。昨晩の路地から自分で移動したとは考えにくい。もしかしたら、自分も静蕾と一緒に攫われ、ここに捨て置かれたのだろうか。

何か盗られたのだろうかとポケットに手をやる。バイクのキーも財布も携帯電話もちゃんとある。カメラなどが入ったリュックもベンチの脇に放り出されている。念のため、財布の中も確認するが何も盗られた形跡はない。リュック中身も確認し、デジタルビデオのデータも見てみる。影山氏と相手の女性の笑顔の写真が表示され

る。これで、物取りの仕業ではなかったことが分かった。
しかし、警察に駆け込んだところで、僕は静蕾の名前しか知らない。まともに相手をされるとも思えず、途方に暮れてしまう。
こうなったら、垣内所長に頼るしかなく、僕はバイクを停めてあった路地を目指して取りあえず移動することにした。

vol. 5

幸いバイクは盗まれることもなく、元の場所にあり、少し僕は安堵する。しかし、細い路地の端に転がっている静蕾に渡したヘルメットを見付け、僕の憂鬱さは加速度を増していく。ヘルメットを拾い上げた僕は、既に無気力と無力さに打ちのめされ、細い路地から空を見上げる。

「今日も暑くなりそうだ」

ビルに切り取られた空を眺めながら僕は呟いた。腕時計をしない僕は携帯電話で時刻を確かめる。午前五時半を少し回った頃だった。

昨日の仕事の成果を報告するにしても所長を除けば、まだ誰も出勤していないはずだ。僕は垣内所長がどこに住んでるのか知らないし、僕よりいつも早くから事務所にいて、僕がどんなに遅くなっても僕より早く帰ることはなかったので、一時は事務所に住んでいるのかと勘ぐったこともある。

事務所に電話するより行ってしまった方が良いと判断した僕はバイクのエンジンをかける。人影もない街にバイクの排気音がこだまする。

事務所には明かりが付いてなく、僕は鍵をあけて中に入る。

「随分と手間取ったもんやな」

急に声をかけられた僕は本当に二、三センチは飛び上がっただろう。見れば奥の所長席に両足をテーブルに投げ出した状態の垣内所長が僕をじっと見つめている。他に出社している者はおらず、窓を開けていない事務所は早くも蒸し暑さを感じる程度になっている。

「所長・・・」

「窓、開けてくれや」

僕は所長に言われたとおり、事務所の窓を開けて回る。少しだけ、涼しい空気が入り、淀んだ事務所内の空気をかき回す。

「で、影山氏の件は、うまくいったんか？」
「はい」
「じゃあ、報告書を作成して俺に回してくれ。ああ、一応大石くんに目を通してもらえよ」
「はい」
ここで、一呼吸おいて、僕は静蕾の話を切り出すことにした。
「所長、実は・・・」
僕の様子を訝しげに見た所長は、足を机から下ろす。
「珈琲でも淹れたるから、そこらへんに座っとけ」
そう言いながら、所長は事務所に備え付けのミニキッチンへ向かった。
自分の席に座るのも所長と話をするには都合が悪いだろうと、打ち合わせ時に使うソファに座り込み煙草に火を付ける。勿論、依頼主を応対するのは別に応接室があり、ここは主にチームで仕事をする際の打ち合わせ場所に使われている。
「随分虚ろな顔をしてるな」
垣内所長がそう言いながら、マグカップを僕に渡してくれる。向かいの席に深々と腰を下ろした所長も煙草に火を付け、ふっと煙を天井めがけて吐き出した。
「実は昨日、事務所を通さない形で兄を探して欲しいと依頼をされて・・・」
「依頼主は？」
「朱静蕾という女子高生です」
「静蕾・・・」
所長が眉間に皺を寄せ、何かを思い出そうとしているように見える。それに構わず、僕は話を続ける。
「兄の名前は銘傑。日本に帰化して今は金田尚貴と名乗っているそうです」
「銘傑に静蕾・・・。何故、お前に依頼した？」
そう言いながらも所長の視線は宙に彷徨い、何かを考えているよ

うに見える。
「彼女のお爺さんが、所長やうちの事務所のことを知ってるらしくて・・・」
僕の言葉が終わらない内に、身を乗り出した所長は「そうか、楊(やん)さんのお孫さんか」と呟いた。
「楊さん？」
「それはいい。それで、どうした？」
「えっ？」
「引き受けることにしたのか？」
「それが、彼女、攫われてしまったんです」
「なんだと？」
「彼女は、僕の尾行についてきてました。絶対に昨日の内に依頼の内容を話しておきたいから、と言って」
「で？」
「影山氏がホテルから出てくるまでの間に彼女から兄さんのことを色々聞きました」
「攫われた、というのは？」
所長の顔色が変わっている。楊氏が何者か知らないが、所長の知り合いであることは確かなようで、僕の言葉を急かすように促してくる。
「兵庫(ひょうご)駅近くの細い路地にバイクを停めていたんで、そこまで二人で戻り、バイクに乗ろうとしたときでした」
「うん」
「その時に白いバンが僕らの進行方向を遮り、背後から来た外人が静蕾を羽交い締めにしたんです」
「ふむ」
「必死で抵抗したんですが、数人いたようで僕は殴られて気を失ってしまったみたいで・・・」
「何故、外人と分かった？」
「僕が見た三人はみんな目出し帽を被っていたんですが、取っ組み

合いになったとき、偶然一人の帽子を掴んではぎ取ることができました。赤毛の明らかに白人でした。それで気が付いたら僕は公園のベンチで・・・」
　と言い出しかけた僕を手で制し、所長はどこかに携帯をかけ始めた。
「ウェイ、ニーハオ。シーヤンセンシェンシェンシェンマ？」
　恐らく中国語なのだろう。楊と聞こえたから先ほどの楊氏に電話をしているのだろうとしか僕には分からない。
「ええ、垣内です。お久しぶりです」
「静蕾さんのことで」
「ええ。昨晩は私の部下と一緒だったのですが、攫われてしまったようです」
「申し訳ありません」
「さあ、見当が付きません。部下が言うには相手は白人。恐らくプロということは間違いないでしょう」
「銘傑くんも行方不明だとか？」
「事情は知りませんが、もしかしたら関係があるかもしれませんね」
「楊さん、あなたもしばらく身を隠した方がいいかもしれない」
「ええ、『泊桂（ぽうくい）』ですね。後ほど伺います」
　電話を切った所長はしばらく厳しい顔で考え込み、再び煙草に火を付ける。
「翔平」
「はい」
「気が付いたら、別の場所にいたんか？」
「はい。湊川公園のベンチで寝てました。どうやってそこに行ったのか、記憶が無いんですけど」
「腕を出して見ろ」
　意味は分からないが、いつもの呑気な所長ではなく、厳しい目つきが真剣さを物語る。
「やはり、な。お前、頭が痛いだろう？」

「はい」
「腕を良く観て見ろ」
先ほど所長が目を凝らしていた場所に目を向ける。肘の内側に針で刺したような跡が微かに残っている。
「これは・・・？」
「舌が痺れてないか」
「確かに口に違和感があります。でもなんでそんなことが分かるんです？」
「お前も一緒に攫われたんや」
「は？」
「で、自白剤を打たれた」
「自白剤？」
「恐らくＬＳＤ系だろうな」
「それって麻薬の？」
「ま、そんなことはどうでもいい。静蕾を攫った奴らは、お前に自白剤を投与し、知っていることを自白させようとしたはずだ。結局静蕾が兄の捜索をお前に依頼しただけと分かった奴らはお前を公園に放置した、まあそんなところだろう」
「はあ」
話が急展開すぎて、ついていくのがやっとの僕であっても、憂鬱さは追い払われた。珈琲と煙草で少し頭もスッキリしたと思いたい。
「お前は運が良かったな」
「殺されなかったこと、ですか？」
「お、珍しく回転が速いじゃないか。そうだよ。本来なら用無しと分かった時点で消されていても不思議はなかった。奴らにすれば、死体を処分するのが面倒だっただけなんだろうな」
所長が冷静に話すのを聞いて、今更のように膝に震えがやってくる。
「静蕾を助けたい」
僕は震える膝を必死で押さえ、そう呟く。

「楊(やん)さんは名前を正盛(せんしぇん)という。聞いたことはないだろうが、在日華僑の中では相当な地位にある人だ。娘は同じく実力者の朱家に嫁いだ。俺は銘傑や静蕾と遊んでやったこともある」
「知り合いやったんですか？」
「ビジネスだがな」
「そうですか」
「お前の落ち度は俺の落ち度でもある」
「そんな・・・」
「まあ、聞け。そんなわけで、静蕾や行方不明の銘傑も俺が探すことになるだろう。先ずは楊さんに話を訊かなくてはな。お前も付いてくるか」
「はい」
僕は力一杯答え、立ち上がった。
「まあ、そう焦るな。もし静蕾を攫った奴らの目的が兄の銘傑なら、居所を知らない静蕾は、取引の材料になる。少なくとも今のところ静蕾は無事や」
所長の言葉に少し落ち着きを取り戻し、僕は再びソファに腰掛ける。僕の様子を面白がるように見ていた所長が再び言葉を発する。
「銘傑と関係がない場合、例えば組織的な人身売買グループが静蕾を攫ったのなら無事ではないだろうけどな」
「えっ」
再び僕に不安がのし掛かってくる。朝から気分は上がったり下がったりで、十日分の感情を使い果たしたような気持ちになってくる。
「冗談や。チャイニーズマフィアならともかく、白人が組織だって人身売買を日本でやるという話は聞かん」
所長はどうやら僕をからかっているらしい。普段あまり感情を表に出さないというか、出せない僕がおろおろしているのが面白いのだろう。
「もう一カ所電話をかける。出かけるのはその後や」
そう言って課長は再び携帯を取り出した。

僕は何もすることがなく、既に生ぬるくなった珈琲を啜り、煙草に火を付け心を落ち着かせようと挑戦してみる。
「片桐か？　俺だ。垣内だ」
初めて聞く名前だ。僕には片桐氏が誰なのか、全く見当も付かない。煙草を吸いながらそれでも所長の話に耳を澄ませる。
「最近どこか目立った動きはないか？」
「ボロジェンコ？　勿論、会ったこともあるさ。ＳＶＲ（ロシア対外情報庁）だったな」
「アゼルバイジャン大使館の動き・・・もしかしてグルジアか？」
在アゼルバイジャン大使館は、在グルジア大使館を兼轄している。
ロシアとグルジアと言えば、今まさに紛争状態の国ではないか。あまりテレビを見ない僕だってそこくらいのことは知っている。
南オセチア自治州は国際的にはグルジアの領土だが、事実上は独立状態になっており、その地をグルジアがまず進攻、それに対してロシアがグルジアに独自の軍事制裁をしているのが最近の状況だ。
南オセチア自治州の住民であるオセット人の独立運動にロシアが手を貸してきた経緯から、グルジア対南オセチア・ロシアという対立の構図がここ数年深刻化していた。グルジアは元来、ロシアにエネルギーの多くを依存している国でウクライナがエネルギー供給をロシアに止められ窮地に追い込まれたように、グルジアにもその危険性がある。
しかし、グルジアにはカスピ海の原油を黒海まで送る原油パイプラインという武器があり、これは欧米諸国がロシアを抜きにカスピ海の原油を確保する格好の手段となる為、グルジアはウクライナよりも欧米諸国、特にアメリカの支援が受けやすいと踏んでいるはずだった。しかしロシアも二十一世紀に入り、急速に経済復興し、原油の輸出量はサウジアラビアと拮抗する石油大国になっている。
ロシアとしては、これ以上旧ソ連諸国のロシア離れ、欧米勢力の伸張を防ぐ意味でも、ここは弱気になるわけにはいかない。
このところの原油高騰により、ロシアにとって原油は欧米に対

する立派な武器となっている。これからも、原油を武器にして、グルジアとロシアの対立は当分続いていくだろうし、だから紛争もなかなか終わらないだろう。
「日本で何をしているのか・・・」
「それ以外でめぼしい動きは・・・そうか、分かった。また情報があれば流してくれ」
　そう言って所長は電話を切った。
「ロシアやグルジアって・・・」
「このあたりで、白人が起こす犯罪率は低い。まあ、今はバラバラのピースだが、もしかしたら関係してくるかもしれない」
「まさか」
「長年の勘だよ」
「ところで、ＳＶＲって何ですか？」
「お前もＫＧＢくらい聞いたことがあるだろう」
「ええ」
「ソ連の崩壊と共にＫＧＢは解体され、現在、ロシアでの諜報活動はロシア対外情報庁、つまりＳＶＲが行っているんや」
　そのＳＶＲのボロジェンコなる人物と所長は面識があるという。背筋に薄ら寒い感覚が走り抜ける。それでも、僕は聞かないわけにはいかなかった。
「所長って一体、何者なんです？」
　にやりと僕に向かって所長は笑い、「いずれ分かるかもな」と答えた。
「さて、出かけるか」
　立ちつくした僕をそのままに所長は事務所の外に出かけていく。
　僕は慌てて窓を閉めて回り、事務所の鍵をかけて、所長の後を追う。所長は事務所の駐車場においてあるシビックのエンジンをかけているところだった。
　事務所の駐車場にはいわゆる大衆車と呼ばれる車が常時六、七台は停まっている。尾行に使うための車たちだ。ワンボックスやセ

ダンや軽四やどこでも走っていそうな車ばかりで目立つ車は無い。半年から一年で数台が入れ替わるこれらの車を使って、僕たちは仕事をしているわけだ。

僕が助手席に座るのを待って、車は発車した。恐らく行き先は先ほど所長と楊氏が話していた『泊桂』だろう。中華街はたいていの店を美由さんと行っているつもりだったが、そのような店は聞いたことがない。少し離れた場所にあるのか、全く中華街と関係ない場所にあるのか、いずれにしても僕は覚悟を決めて所長と行動を共にする決意をした。

◇

所長は元町の立体駐車場に車を停め、中華街に向かって歩き始める。朝早いこの時間に開店している店もなく、閑散としていながらも原色が華やかな中華街を進んでいく。

「僕、結構中華街来るんですけど、『泊桂』っていう店は知らないです」

「そらそうやろうなぁ」

そう言いながら、『老祥紀（らおしょうき）』の裏口に勝手に入っていく。『老祥紀』なら肉まんの有名な店で僕も何度が訪れたことはある。裏口には扉だけといっても過言でないような小さな小屋が建っていて、所長は勝手にそのドアを開けて中に入り込む。建物は小さいはずで、ドアをくぐれば、地下への階段があるだけだった。

「『泊桂』ってのは、華僑だけの料理屋や。それも大物だけのな。というわけで、礼儀作法には気を付けろよ」

階段を下りきったところは、少し広いロビーのような空間が広がり、床には長い毛の赤い絨毯が敷き詰められている。その先には両開きの龍の彫刻のある扉と少し離れた場所に簡素なスチール製のドアがある。

僕たちの気配を感じたかのように、スチール製のドアが開き、深

紅のチャイナドレスを着た女性が現れた。スリットが深々と入ったドレスから覗く太股に視線が行くのを理性が押し止め、女性の顔を見る。黒髪は長く真っ直ぐで瓜実顔(うりざねがお)には、少し憂いを含んだ黒い瞳、妖艶な唇が乗っている。

「お久しぶりね。垣内さん」

その女性はたどたどしい日本語で所長に話しかける。

「覚えていてくれてたとは光栄やね」

と所長は答える。

「楊先生がお待ちよ」

そう言ってその女性は両開きの扉に向かって歩き、その扉を開け放つ。

煌びやかな深紅や緑の原色に彩られた壁には鳳凰や龍や虎が描かれ、十人は座れそうな円卓が五つ置かれている。まだ少し眠たい僕にとってあまりにも異質で目に眩しい光景だった。

部屋の一番奥の上座にあたる円卓に一人の老人が腰掛けている。民族衣装などでも着ているのかと思いきや、スーツ姿でその老人は眼光鋭く僕たちを眺めている。東洋人にしては彫りは深い方で、鷲鼻と落ちくぼんだ目が、西洋人とのハーフでは、とも思わせる。小柄ながら座っているだけで、圧力を感じさせる存在感を持つ、それが楊氏だった。

「お久しぶりです」

所長が挨拶をする。無言で頷き、目で僕の方を見やり、誰何(すいか)する。

「助手です。形(なり)は優男ですが、将来有望と思っています」

そんな言葉で所長に紹介されることが意外で、思わず所長の顔を見てしまう。しかし、中国人は礼儀を重んじるという所長の言葉を思いだし、「小鳥遊翔平です。よろしくお願いします」と言いながら、僕は深々とお辞儀をした。

空調は最初、かなり快適に思えたが、楊氏の威圧感と所長の生真面目な所作に、僕の額からじわり、と汗が滲み出てくる。

僕の挨拶で、楊氏の口元に笑みが浮かび、威圧感がふっと消え

る。眼光の鋭さも消え、揶揄するような光を目に湛え、楊氏は所長に話しかける。
「彼を君の本業に付き合わせるのか？」
「今回の件を耐えることが出来れば、私にとって新たな助手が誕生することになる。私もそろそろ現場からは抜けたいですからね」
ということは、所長の本業は探偵などではなく、ＳＶＲと関わりを持ったり、華僑の実力者と会ったりする、ちょっと違法性があるというか、社会の裏側を知り尽くすことを生業とする仕事なのだろうか。好奇心はあっても本能が拒絶しようとする僕の弱い意志は、二人の会話をただ黙って聞いているしかなかった。
楊氏はすっと僕たちから目を逸らし、テーブルの側で身じろぎもせず立ちつくす、僕たちを案内してくれた美女に目を向ける。彼女は頷き、厨房の方へ向かって去っていく。
「さて、君たちも朝はまだだろう。本題に入る前に朝食でもどうかな？」
「ありがたいですねえ」
と所長は答え、僕はこの雰囲気に飲まれ、食欲どころではなかったが、頷くしかなかった。
あらかじめ用意されていたのか、さほど待つこともなく、給仕の者が粥と刺身などを配膳していく。
僕も所長も楊氏が食事に手を付けるまで食べるのを待った。食欲どころではないと思っていた僕の胃が、香しい粥に反応し始め、現金な僕の体に少し情けなくなってくる。
やがて所長も僕も粥を食べ始める。普段、中華街に行っても粥など食べない僕は、風邪を引いたときの梅干し入りの粥しか記憶にないが、この粥により人生観が変わるほどの衝撃を受けた。程良い出汁は舌をとろかし、刺身を載せ、半生になったそれと粥を口に運ぶと幸福感を感じる。しばし夢中で食べた僕は、静蕾のことを思い出し、急速に食欲が失せていく。
食後に出された烏龍茶を前にして、漸く楊氏が本題を切り出し

た。
「静蕾のことだが、白人系の外人に攫われたというのは本当かね？」
「この小鳥遊が確認しています」
所長の言葉に反応し、楊氏の射るような視線が僕に向けられる。
「間違いありません」
僕は必死の思いでそう答えた。
「見当は付いているのか？」
楊氏は所長に視線を戻す。
「それを答えるには、まず、静蕾の兄、銘傑、今は姿を眩ませている金田尚貴氏のことをお伺いしなければなりません」
「というと？」
「この神戸という地は、日本最大の指定暴力団山一組と日本最大の華僑在住の地です」
そう答える所長に僕はそっと小声で尋ねる。
「最大の華僑って・・・。横浜の中華街の方が大きいじゃないんですか？」
所長が僕に向き直り、説明する。
「横浜華僑約六千人に対して神戸華僑は一万人を超えている。お前が言うのは、横浜中華街と比べると神戸南京町は随分と小ぶりであるということやろう？」
「あ、はい」
「横浜中華街は華僑たちの実際の生活の場やけど、神戸の南京町（なんきんまち）に華僑の居住者は少ない。これは神戸南京町がほぼ純然たる商業地となっているためや」
「はあ・・・」
「実際の神戸華僑の居住地は、鯉川筋（こいかわすじ）、トアロード、北野（きたの）町とかが多いんや」
「そうなんですか」
近くに住んでいながらそんなことも知らない幼稚な僕が、このような重要な話の場に居て良いものなのか、居心地の悪さを感じてく

る。
　所長の言葉に続けて、楊氏が僕に補足の説明をしてくれる。
「こういったことは、ここ神戸では南京町が居留地ではなく雑居地に開かれた結果ではあるんやが、また同時に我々神戸華僑の者が日本人社会と良好な関係を築いてきた証拠ともされている」
「そうなのですか」
　楊氏の言葉に慎重に相づちを打つ。
「小鳥遊君だったかな、君は覚えているかな？」
「何を、でしょうか？」
「二〇〇五年に北京や上海等で大規模な反日デモが起こった際、東京や大阪の中国関連施設に対していやがらせ等が発生したことを」
「あっ、覚えてます」
「しかし、ここ神戸の華僑関連施設ではほとんどそういう事は起きなかった。それほどまでに我々は日本に溶け込んでいるのだ」
　そう言って楊氏はパイプに火を付け、ゆっくりと旨そうに煙を吐き出す。
「言葉は悪いが、山一組と神戸華僑で土台が支えられている神戸には通常、組織だった白人の犯罪組織は存在しないということや」
　早速所長も煙草に火を付け言葉を発する。所長は続けて言う。
「そこで、楊先生に訊きたいのは、静蕾ちゃんを攫ったのが組織だった白人だったとしたら、それらのグループは、長くこの地には滞在していなかったはずで、恐らくそれは失踪した銘傑に関係がある、と考えざるを得ないことになる」
「儂もそんなグループが入り込んできているとは知らなかった。最近、関東から日本語もろくに話せない中国人マフィアのグループが神戸に入り込んできている、ということは聞いているが・・・」
　所長の眉が一瞬跳ね上がる。
「それは興味深い話だ。でも、先ずは銘傑のことです。静蕾ちゃんから聞いた小鳥遊の話では銘傑は日本人に帰化し、日本の会社に就職したらしい」

所長は静蕾、銘傑の幼い頃を知っている。事務所での会話でも幼い頃遊んでやったという所長の言葉を思い出す。しかし、今の所長はそんなことはおくびにも出さず、ビジネスライクに話を進める。
楊氏にしても、自分の孫の話なのに、悲壮感は感じられない。
僕の知らない世界が確かにそこにあった。
所長の片腕になるまでにはまだまだだろうが、僕は静蕾を助けたい。この知らない世界で僕にどれほどのことが出来るのか未知数で心細いが、必死にやってみようと久しく感じたことのない強い衝動が僕の中で生まれつつあるのを感じていた。
「グローバル商事って彼女は言ってました」
僕も知っていることはどんどん口に出そうと決意する。
「グローバル商事？」
所長は眉を顰め、楊氏に向き直る。
「勿論、あそこがどういう会社かご存じですよね？」
「藤本興業のフロント企業ということか？」
「そうです。藤本興業っていえば、山一組系の新興組織高瀬組の直系ですよ。なんでそんな所に帰化した銘傑君が就職したりするんです？」
「銘傑は・・・奴は中国人としての誇りを持っていた」
苦しげに楊氏が言う。中国人としての誇り、それは静蕾も言っていたことだ。しかし、それがどうして帰化までしてヤクザのフロント企業に就職しなければならないのか、僕には全く見当もつかない。
楊氏は続ける。
「中国人としての誇りをはき違え、奴は中国に出張を続けるうちに、中国国家安全部に自らを売り込み、安全部の諜報員となったのだ」
諜報員？
スパイのことなのだろうか？
どんどん大きくなっていく話に、空調が利きすぎているような寒気を感じる。
「その任務が日本人として高瀬組に近づけ、ということだった、と

？」
所長が顰め面をしたまま、問いかける。
「儂は何度も説得したが、銘傑は私の言葉には耳を傾けなかった。結局、今、潜伏しているのか、中国に戻っているのか、儂にも分からん。が、しかし、高瀬組に関連した動きをしているのは間違いないと考えている」
楊氏の口調には確信があった。
「調べてみましょう」
所長が言う。
「静蕾は巻き込まれただけだ。あの子だけでも無事に帰ってきて欲しい」
楊氏の口調に苦悩が刻まれているのが分かる。知っていることを吐き出してしまった僕は何も口を挟むことが出来ず、じっと所長と楊氏の会話に耳を傾けているしかなかった。
「最前の努力はしますよ」
所長は、努めて明るく軽い口調でそう言い、立ち上がった。同時に楊氏も立ち上がり、所長に向かって手を差し出す。
「これは契約じゃありません。私も静蕾ちゃんを助けたい。握手は彼女を助けたときに取っておきましょう。旨い酒でも用意しといてください」
それを聞いた楊氏は、「頼む」とだけ小声で呟き、再び席に座った。
所長はそれ以上何も言わず、楊氏に背を向け、立ち去り始めた。軽く楊氏に黙礼した僕は、所長の後を追って、外に出る。

◇

店を出た僕たちは、車の停めてある駐車場に戻った。
朝の活気がようやく街を覆い始める。サラリーマンや学生たちが元町商店街を闊歩する。彼らには彼らの日常があり、一日のスタ

ートをどんな気持ちで迎えているのか分かりはしないが、少なくとも僕は焦燥感と疲れを抱えたまま、今日一日を過ごすのだろうとぼんやりと考える。
立体駐車場の入り口で所長が立ち止まり、携帯をポケットから取り出した。
「片桐、垣内や」
また片桐氏だ。
今朝も早くからロシアやグルジアやらの話を所長と話していた人物だが、一体どんな人物なのだろう。それを知れば所長の素性も少しは分かるかもしれないな、と思い、あとで聞いてみようと決意する。
「恐らくロシアが動き出してる。いや、俺の勘だが、グルジアではないな」
「ロシアは新宿やらそっちでは、色々確保してる場所もあるだろうが、関西方面にはそれほど拠点はないはずや。神戸に絞って探してくれないか・・・。そうそう中国人マフィアが関西に流れ込んでいるらしい。そっちはまた島崎にも聞いてみる。じゃあ、頼む」
所長が携帯を切り、少し訝しげな表情で携帯をじっと見る。片桐氏のことを聞こうと口を開きかけた僕を手で制し、携帯の電源を切る。
「車のダッシュボードに小型のドライバーセットが入っている。俺はそこの喫茶店にいるから持ってきてくれ」
所長は車のキーを僕に渡し、さっさと喫茶店の方に向かって歩き出す。
半ば口を開いたままの僕は、自分が間抜け面をしていることに気づき、少し照れながら周りを見る。当たり前ではあるが、誰も僕になんか目もくれず、会社や学校へ急いで歩いている。自分に気恥ずかしい思いをしながら僕は、車からドライバーセットを取ってくることにした。
急いで喫茶店に入ると、珈琲を飲みながら所長が煙草に火を付け

るところだった。テーブルには、もう一杯の珈琲が置かれてある。その前に腰を下ろし、僕も煙草に火を付ける。
「これ、バラしてくれ」
と所長は僕に携帯を渡してきた。
事務所でも山崎さんならこんなこと余裕だろうになあと自分の不器用さを情けなく思いながら、小型のドライバーで所長の携帯をこじ開けようと試行錯誤する。暫くして携帯のカバー全体を開けることができた。それを受け取った所長はしげしげと中身を眺めながら言った。
「安全部は仕事が早いな」
「は？」
「ここをちょっと見て見ろ」
所長が携帯を差し出す。所長の指先にはマイクロSDカードをさらに一回り小さくしたような部品が取り付けられている。携帯をバラしたことなど無い僕は、それが正規の部品なのか、そうでないのか見当もつかない。
「これ、何です？」
「盗聴器だよ。結構最新式やと思うなあ」
慌てる様子も見せず、所長はぷかりと煙を吐き出す。
「と、盗聴器？」
「お前らが業務で使ってるやつより小型で優秀や。ま、国家予算で作られたものはそら違うわな」
「国家予算て・・・。それに安全部って楊さんとも話してた中国の？」
「そうや」
「・・・話の腰を折りますけど、こんなこと盗聴器の前で喋ってて、ええんですか？」
「これは、通話内容を盗聴することに特化されてるタイプや。この機械を前に大声で叫んでも問題あれへんわ」
「じゃあ、片桐さんって人との会話は？」

「そういうことになるな」
「片桐さんって、一体どういう方なんですか？」
「片桐か・・・。あいつは、警察庁外事情報部の外事課長や」
「ややこしそうな部署ですね」
「外事情報部には外事課とと国際テロリズム対策課があってな、外事課では、主に国内の外事的脅威への対応、つまり、外国による諜報活動の発見や検挙、大量破壊兵器関連物資の不正輸出等による拡散の防止、検挙、外事対象の動向把握とかを担当している」
「ああ、それで大使館とか中国の安全部とかの話が出てくるんですね」
とは言ったものの、それでは所長は何者なのか、余計に混乱してくるのを自覚する。
華僑にも顔が利き、警察庁のスパイ担当課長に頼み事を平気でする所長は、それこそ諜報員とか何かなのだろうか。あまりにも僕の日常とかけ離れてしまい、途方に暮れてしまう。
「で、安全部が所長の携帯に盗聴器を仕掛けたっていうのは・・・」
「ま、それはいずれ分かるやろ。それより、今度はこっちがそれを利用する番やな」
所長は、無邪気そうに笑顔を見せて、旨そうに珈琲を啜る。どう考えればこんな状況で無邪気に笑えるのだろうか、きっともっと修羅場をくぐり抜けてきたのだろうと容易に想像は付くが、その修羅場がどんなものだったのか、考えてみるだけでもうっすらと鳥肌が立ってくる。決して臆病ではないと自分に言い聞かせたとしても、このまま所長と行動を共にしていて大丈夫なのだろうかという意気地のなさも這い出てくる。
所長は、いつも携帯を持ち歩かず、事務所では机の上に放りっぱなしで出かけることが多い。だからといって、中国人の諜報員がのこのこ僕らの事務所に入ってきて、所長の携帯を弄っていたら嫌でも目に付くだろう。どこで携帯に細工されたのか、所長には心当たりがあるらしい。いずれにしても、盗聴器が仕掛けられていたのは

事実のようだ。僕にはその機械が盗聴器かどうかなんて分からないが、所長が中国の安全部に仕掛けられたというのだからそうなのだろう。

今のところ、僕には所長しか頼ることも信用することも出来ないわけで、だからといって、不思議と心細くはない。緊迫感なく、煙草の煙を吐き出す所長の仕草が僕を安心させるのろう。今度はその盗聴器を使って逆に安全部を利用しようと考える所長の姿に僕の意気地も復活する。

「利用って、どうするんですか？」

「そのままの情報を流す」

「は？」

「どうせ、ロシア人グループの居場所を突き止めたところで、俺ら二人では何もできへんやろ？」

「はあ」

「代わりに安全部を使おうってわけや」

「そんなこと、できるんですか？」

「今、動きは銘傑、静蕾を中心に回っている」

「確かに」

「安全部も静蕾の身柄を確保したいだろう。で、相手がロシア人と知れば、何か手は考えるやろうが、そこに乗り込むだろう」

「安全部が、ですか？」

「そうや。で、その混乱の中で静蕾を救い出せればそれが一番いいんやけど、そうでなくても相手が安全部の方が俺たちにとって相手をしやすいだろう、と俺は踏んでる」

ちょっとお気楽すぎるのではないのだろうか、とも思うが、確かに僕と所長の二人でのこのこロシア人グループの所に行って、「静蕾を返して」などと言っても、下手すれば、ハーバーランド辺りの海面にぷかぷか浮かぶか、錘でもつけて沈められるかだろう。

「それにしても、所長は今回の静蕾の誘拐とロシアとグルジアの紛争に何か繋がりがあるって思ってはるんですか？」

漸く僕は、今まで疑問に思っていたことを口にすることが出来た。
　静蕾を攫ったのがロシア人、しかもＳＶＲという機関なら、これはロシアという国が動いていることになる。所長と片桐氏の話には、グルジア大使館の動きも慌ただしいという。ロシアとグルジアは今現在、紛争中だ。ただ、これだけの事実では静蕾の誘拐は説明できない。静蕾の兄、銘傑が関係しているとしても、銘傑は中国の諜報機関所属だ。しかも、高瀬組関連の企業に潜入しているらしい。となるとやはり話を関連させることは出来ない。
　所長の頭の中はどのように整理されているのだろう。僕が状況に巻き込まれているのは事実で、それはそれで非現実的なんだけれども、自分がどんな状況に巻き込まれているのか判然としない現状は僕に焦燥感だけを与えてくる。
「翔平、お前、今のロシアとグルジアの関係を知っているか？」
「まあ、紛争中であるということくらいは・・・」
「アメリカは、自分本位の国や」
「は？」
「グルジアの軍隊は、自国領やけど半独立状態で中央政府に敵対してきた南オセチア州の州都ツヒンバリに侵攻し、ロケット攻撃などで市街を破壊した」
「そうなんですか？」
「ロシア政府が発表したところでは、グルジア軍は侵攻時に約二千人の市民を殺害したらしい」
「そんなに・・・でも、それとアメリカが自分本位って？」
「まあ、聞け。で、南オセチアには、ＯＳＣＥ（欧州安全保障協力機構）の協定に基づき、ロシア軍が平和維持軍として駐屯しているけど、グルジア軍はこのロシア軍をも攻撃し、十五人のロシア兵が戦死したとされている。まあこれが今回の紛争の発端やな」
「そうなんですか？　てっきりロシアが勝手に攻め込んだのかと・・・」
「お前、現役高校生だろ」

「そうですよ」
「大学へ行く気はあるんか？」
「一応・・・」
「じゃあ、もうちょっと国際情勢に強くなれよ」
「はい・・・」
国際情勢に強い探偵を世の中、必要としているのだろうか、とぼんやり考えてみる。しかし、大学受験を目指すなら、それなりに世界情勢の知識も必要なのかな、と感じてしまう。
やはり所長は今回の事件を皮切りに、今後もこういった事に僕を使おうとしてるのか、と冷静に判断し、思考はそこで停止する。冷静に判断できたまでは良かったが、それでは僕は一体何者になってしまうのか、そこから先がまったく見えなく、暗澹たる気持ちが重く僕にのし掛かる。そんな僕にお構いなしに所長は続ける。
「ことの発端はアメリカや」
「アメリカが関係してるんですか？」
「そうや。一般的には、グルジア側が侵攻のタイミングとして二〇〇八年の八月初旬を選んだのは、北京オリンピックのため開会式にロシア首相が北京に行っていて、ロシア大統領もボルガの川下り船中で夏期休暇中だからロシア軍の対応判断が遅れると予測したからではないかと分析されている」
「はあ」
「実際には、ロシア首相は北京からロシア軍に反撃の指示を出し、ロシア軍はすぐに南オセチアに越境進軍し、グルジア軍を退散させたわけやけどな」
「はい」
ここら辺はもう頷いておとなしく話を聞いているしかない。
「となると、もう少し穿った見方もできる」
「というと？」
「グルジアが侵攻したタイミングについて、八月七日が選ばれたのは、翌日から米大統領選挙戦で優勢な民主党候補が、夏期休暇で故

郷のハワイに戻って選挙活動を一週間休んだためで、共和党政権が、共和党候補を挽回させるために、グルジアのサーカシビリを焚きつけて侵攻させたという推測や」
「たかが選挙で、そこまでするんですか？」
「アメリカはそういう国や。実際、アメリカの議会では、翌年度予算で、Ｆ２２戦闘機とか、高価な新兵器開発の予算が削られそうになっていたのが、グルジアの開戦で『ロシアと戦うにはＦ２２が不可欠だ』という議論が噴出して軍事産業から献金されている議員たちは一挙に活気づいたしな。案外兵器産業会社あたりが今回の紛争も画策してたりしてな」
　所長はニヒルに笑い、煙草に火を付ける。
「でも、アメリカはロシア軍を非難してますよね。グルジアを紛争へ焚き付けたのに、助けないんですか？」
「そこや」
「は？」
「グルジアを助けるために冷戦を再燃させるには、アメリカにとって条件が悪すぎる」
「条件・・・」
「アメリカ軍はすでにイラクとアフガニスタンで過剰派兵状態や。国防総省の将軍たちは、イラン空爆にも反対しているぐらいやから、アメリカ対ロシアの全面戦争に発展するかもしれないグルジアへのアメリカ軍派兵には反対や」
「そんな・・・」
「グルジアには、アゼルバイジャンや中央アジアの石油をトルコに運ぶＢＴＣパイプラインが通っている。中央アジアの石油利権がほしい米欧にとってグルジアは決定的に重要だ、という見方もあるが、俺から見ると、これは誇張や」
「そうなんですか」
「ロシアは最近、中央アジア諸国との間で石油ガス利権に関する独占的な契約を相次いで結んでいる。中央アジアの石油ガス利権はロ

シアに握られ、米欧はＢＴＣパイプラインだけ持っていても意味がなくなりつつある。アメリカが派兵してまでグルジアを守る利点はない、というわけや」
「グルジアはアメリカにおもちゃにされただけやって言うんですか？　何千人も死んだのに？」
「それが国と国との繋がり方や」
　所長とこれからも探偵との別の事案で組むということになれば、こういう醜悪で壮大な背景を意識して動かなければならないということなのだろう。まだ高校生である僕には荷が重すぎる。が、皮肉なもので、興味がないわけではないというのが僕の本音だ。憂鬱な日常から脱却できるのならという安易な思考が僕を支配するが、何千人も死ぬのがゲームのように行われている世界で僕の命なんて蚤ほどの価値もないと気づいた時、それは嘔吐感を伴い鳥肌を立たせる。
「そうか・・・」
　所長が、ふと思い当たったように呟く。
「翔平、ちょっとお前の携帯貸してくれ」
　言われるままに、所長に携帯を差し出す。所長は、番号を記憶しているのか、どこかに電話を掛けている。
「垣内や。最近の動きで、中国がらみの件、あるか？」
　またしても片桐氏だろうか。話しぶりからすると違う気がする。最後に片桐氏との会話に出てきた島崎氏なのだろうか。片桐氏が警察庁の外事課なら島崎氏は何者なんだろう。もうこれ以上深みに嵌りこみたくない僕と、この現実に少し興奮気味の僕が頭の中でＰＫ合戦をやっているようだ。
「郭恢成（くおふぇそん）だと？」
　所長の顔が真剣になり、相手の言葉に耳を傾ける。
「会ったことは勿論ある。何度も商売の邪魔をしてやったよ。次に会うときには殺されるかな？」
　物騒な会話なのに、所長にはまだ余裕が感じられる。こういう世

界で生き抜いてきた自信なのか、元々そういう性格なのか、そしていずれ僕もそうなっていくのだろうか・・・。会話をしている所長を眺めているしかない僕は、そんなことを考えることくらいしかできなかった。
「北に頻繁に行っていた・・・か。日本へは？」
「消息を絶った？・・・ああ、調べてくれ。連絡を待っとくわ」
そう言って所長は携帯を切り、僕に返した。僕が目で尋ねているのに気づいた所長は答える。
「俺の携帯やと、余計な情報まで安全部に教えることになるからな。しかしそれにしても・・・」
所長はそう言ったきり黙り込んだ。
口を出せない雰囲気に、僕も煙草を銜え、火を付ける。珈琲は既に冷め切ってしまい、飲む気にもならないが、少し口に含んでみる。
「さっきの島崎やが・・・」
「はい」
「公安や」
「はい？」
「公安調査庁。ま、日本のスパイ組織や。そこに最近の中国系マフィア関係で何かないか聞いてみたらとんでもない名前が出てきた」
「『くお』とか言ってた・・・」
「そう。ここまで見えてきたら、俺の推測を全部話そうか」
「是非」
「発端はお前が勝手に巻き込まれたんやが、こうなったら最後まで付き合って貰うしかないしな」
そう言って、所長は煙草を揉み消した。僕も慌てて煙草を消し、神妙な顔つきをしてみる。
高揚感もあり、恐怖心もある。興奮していないかと聞かれたらその答えは「否」だが、所長の推測を聞くことで、もう後戻りできないんだな、という半ば諦めに似た気持ちも混在する。
「郭恢成は武器商人や。人を殺す道具ならなんでも扱う」

「武器商人・・・。所長は会われたことがあるとか？」
「お前の親父も会ってるはずや」
「まさか・・・？」
親父はただの商社マンではないのか？
胡散臭(うさんくさ)い過去を持っていそうな所長とは腐れ縁で、武器商人とも関わりがある。それで、真っ当な商社マンだと言って誰が信用できるだろうか？
「ま、俺らは似たようなことをしてた時期もあったしな」
またしても詮索したくなる気持ちが沸き起こるが、それは今度の事件が終わったらゆっくり聞かせてもらう機会があるかもしれない、それに直接親父やお袋に訊いたら何か分かるかもしれない、と自分に言い聞かせることにした。
「俺が最初に考えたのは、ロシアとグルジアの紛争が何らかの形で日本を舞台に繰り広げられているということや。両国の大使館が俄に動き始めたのには何かある」
「でも、静蕾はロシアやグルジアにはなんの関係も無いと思うんですが・・・」
「そうや。静蕾とこれらの国との紛争には全く関連はない。なら銘傑の方はどうか？」
「でも銘傑は高瀬組に潜入ということで、これもロシアとかは関係ないはず」
僕には一連の事柄が全く嵌ることのないジグソーパズルのように思えてならない。
「だから、推論になる。両国の動きと中国安全部の動きが同時に慌ただしくなったのが気になる。しかも、銘傑が姿を消し、静蕾がロシア人グループに攫われたとたんに、俺の携帯には中国安全部により盗聴器が仕掛けられた。ま、仕掛けられたのはもっと前からだろうがな」
「所長の携帯の盗聴器は、本当に中国の安全部によるものなんですか？」

「これも俺の推察に過ぎん。しかし、安全部はここ神戸では別に珍しくもないから、そう考えるのが妥当だろう。実は心当たりもある」
「盗聴器を仕掛けたのは誰なんです？」
「疑いの段階で、名前は言いたくない。心配しなくても早くて今晩には会えるわ」
「今晩？」
「片桐の連絡次第やけどな」
一通り、所長の話を聞き終わるまでは、僕の頭では整理できそうにない。黙っている僕を見ながら、再び煙草に火を付けた所長は、ゆったりと煙を吐き出し、話を続けた。
「アメリカはグルジアを助けない。このままではグルジアは完全にロシアに掌握されてしまう。そこに武器商人が絡んでくる」
所長が僕の目を見ながら試すように呟く。
「あっ」
僕は一つの可能性を思いついた。
アメリカがグルジアを助けないのなら、グルジアは独力で事態を打破しなければならない。死を扱う武器商人が絡んでくるとなれば、何かしらの武器を手に入れようとグルジアが考えていると考えるのが自然だ。
そう・・・例えば核兵器のように事態を逆転させることができるような武器。
しかし、郭という武器商人にそんなことまで可能なのだろうか。可能であるならば、どこでそんな取引をするのか。
それが日本か。
第三者的な国で、他国ほど治安が悪くない日本ならば、容易に取り引きできると考えたのだろう。そして、何故中国安全部が動いているのか、それは郭が中国人だからか、それとも核兵器自体が中国のものだったからか・・・。
アメリカでのテロ以降、テロ組織そのものは勿論だが、テロ組織が使用した武器の出所である国も、管理責任を国際的に非難され

るようになったと何かで読んだ気がする。中国の安全部はその核兵器を回収もしくは使用不可能にするために駆け回っていると考えれば筋は通る。

僕は興奮して、自分の考えを所長に話した。

「いいところまで行ってる。翔平、お前は勘がいいのかもしれん。これからも役だってくれるかな？」

にやりと笑う所長の口調に僕の背中が総毛立つ。

「いくらグルジアでも核兵器を買う金は無いだろう。郭なら核兵器でも扱えないことはないだろうが、それなら日本で取り引きしなくても、ロシア内部からグルジアに持ち込む方が簡単だ」

僕も少しは落ち着こうと煙草を取り出す。少し手が震えているのを自覚し、それを誤魔化すため、思いっきり煙を吸い込み、ゆっくりと吐き出す。所長は続けた。

「郭の消息はまだ掴めていない。しかし、中国国内と北朝鮮の間をかなり頻繁に行き来していたらしい。北は最近核を抑えられ、外貨を稼ぐため何らかの研究をしているかもしれん

「北？　研究？」

「北朝鮮だよ。北朝鮮が研究している核兵器にも匹敵するようななにか・・・。まあ、商品が何かは分からないが、もしかしたら郭は既にそれを持って日本に入国しているのかもしれないな」

「なんとなく、所長の言われることは分かってきました。でも、そこに静蕾がどう関わっているのかが分からないんです」

「もう少し考える時間を与えてやれば、お前も可能性に気づくだろうが、まあいい。話すとするか」

そう言って、所長は店員に珈琲をもう一杯ずつ注文した。珈琲が運ばれてくるまでの間、二人は無言で煙草の煙を吐き出す。

僕は銘傑のことを考えていた。藤本興業のフロント企業に入社した銘傑は今は行方不明となっている。これが今回の事件に関連するならば、やはり藤本興業のバックである高瀬組の関与を疑わずにいられない。

しかし、高瀬組が関西随一の規模を誇る山一組の傘下であるとは聞いていても、何を主な生業(なりわい)としているのかまでは知らないので、推測がそこで止まってしまう。高瀬組がいきなりロシアやグルジアに関係するとは思えず、ふと郭となら何らかの接点があってもおかしくないのでは、と思い至る。

ウェイトレスが珈琲を卓上に置き、愛想の素振りも見せず、カウンターに戻っていく。所長は新たに火を付けた煙草を片手に珈琲を啜る。

「あの・・・」

僕は、郭と高瀬組になら接点があるかもしれない、それが何であるかは分からないと所長に話した。

「ほう、目の付け所がいいな」

所長はニヒルな笑みを浮かべた。

「翔平の言うとおり、あくまで推測だが、郭は日本での活動にあたり、高瀬組とコンタクトをとったと考えるのが自然だろう」

「ええ」

「高瀬組は山一組の傘下ではあっても、新参者の小さい組織に過ぎない」

「そうなんですか」

「これからのマル暴がのし上がって行くには、強気の抗争好きでははっきり言って無理や。企業と同じく、金がものを言う。薬(やく)は山一組では御法度だし、風俗とか盗難車の密輸といった同業者が既に抱え込んでいる利権に食い込むのははっきり言って難しい」

「そこで、武器供給・・・」

「そうや。郭の武器売買の斡旋をすることで仲介料を得る。その資金はフロント企業でロンダリング。拳銃程度の武器なら他の組でもやっているだろうが、郭が扱う代物は桁が違うと考えるべきや。もしそうなら、高瀬組には願ったりかなったりの話のはずや」

「でも、郭と高瀬組を結びつけたのは誰でしょうか？」

「それが分からん。だから推測なんや。ただ、外国人が目立たない

都市で東京を外し、関西を狙ったのは、郭の考えやろう」
「それは何故です？」
「新宿あたりでは、中国系マフィアも幅を利かせてるし、警察もまだそれなりに強い。正直、ここ兵庫県では山一組が転けたら、自治体もろとも崩れてしまうだろうから、比較的動きやすいのは事実だろう」
「マル暴が潰れれば、県や市にとってもいいことなんじゃ・・・」
「何を言ってるんや。山一組、河稲会、住本会の三者が結束するとアメリカの超有名ソフトウェア会社の規模を遥かに上回る社会集団となるんやぞ」
「へえ」
「ＧＤＰでは韓国、台湾、ポーランド、ハンガリー、ギリシャ、ポルトガルを超えているしな。つまり、中国やインドの国家予算に匹敵する上に、東京都の一年間の予算規模を上回るわけや」
「そんなに」
　僕は驚きを隠すことが出来ない。
「そのうち山一組は兵庫県の税収の六割を占めるから、山一組が解散すると困る事情も大きいってことになる。ところで、新幹線の新神戸駅はなんでわざわざトンネルまで掘ってあんなところに作ったと思う？」
「確かに不便ですよね。新大阪や姫路みたいにＪＲの駅と一緒なら良かったのにって思いますよ。まさかこれも山一組が絡んでるんですか？」
「ああ、そのまさかや。あの駅は山陽新幹線開業当時は無かったと言われている。一応、表向きは兵庫県と神戸市と周辺の財界が造ったといわれているが、事実は山一組の圧力やろうな」
「何故そう考えるんですか？」
「何故って新神戸駅界隈は全国に展開する山一組の『出先機関』や『出張機関』に相当する団体が置かれているからな。国の行政でいえば、東京都を除く道府県が、東京事務所を置いたりしていること

と同じや。それに新神戸駅周辺には、山一組の幹部の豪邸が並ぶし、全国に展開する山口一組幹部の別邸まで置かれている。そう考えるのが当然やろう」
「そうか。それもそうですね」
「一般にマル暴のフロント企業はきっちり納税する。下手に脱税して査察が入って背後関係まで調べられるのはごめんやからな」
所長は珈琲で口を潤してから再び話し始めた。
「話が横道にずれてもたけど、警察も含めた行政が弱く、外国人が徘徊してもそれほど怪しまれない神戸で、儲け話を血眼で探してる組といえば高瀬組や。郭ほどの情報網を持っている奴なら、簡単にコンタクトを取ることができただろう」
「郭は一人では行動しないんすか？」
「基本は数名で動くが、これを期に安全な日本を取引場所にして商売を始めようというなら、地の利もあり、ボディーガードや通訳も引き受けてくれる高瀬組の存在はありがたいはずや。当然、身を隠すのも高瀬組に用意させた場所でのんびりできるしな」
「なるほど」
「で、や」
所長はいよいよ本題、という具合に煙草を揉み消し、話し始めた。
「郭が高瀬組と組んだのなら、そこに銘傑が関わってきてもおかしくないことになってくる」
「というと？」
「銘傑は安全部の人間だ。仮定の上に仮定を重ねることになるが、安全部は郭を、もしくは郭の持つ兵器を追っていたと考えるなら・・・」
「あっ、あらかじめ銘傑を高瀬組に近づかせておくってことですね」
「そうや。そうは言ってもいきなり高瀬組の組員にはなれないだろうし、近づくにはまずグローバル商事、高瀬組のフロントに潜り込むしかない」
「でも、銘傑は行方不明です」

「ああ。消されたのか、自ら消息を絶ったのか・・・」
再び所長が煙草に火を付ける。つられて僕も煙草に火を付け、そういや高三の初めに禁煙を誓ったことを遠い昔のように思い出す。
「でも、仮に銘傑が殺されていたとしたら、組の人間が銘傑の実家を訪ねるでしょうか？」
「そうやった。翔平、お前探偵より、こっちの方が向いてるぞ」
喜ぶべきなのか、僕は少し迷ってしまう。
「銘傑が自ら姿を消した。それはつまり、高瀬組と郭の関係を知ったということや。それだけでは静蕾が攫われることは無かったやろうな」
「ということは銘傑はもっと深いところまで潜り込むことができた、ということですね」
「多分、深入りしすぎたんだろうな。功を焦ったか・・・。郭の持ってきた兵器とやらが持ち出せるものなら、それを奪って逃亡しているのかもしれん」「そう考えると、例のロシア人たちが静蕾を攫ったのも、分かりますね。少なくともロシアには郭とグルジアの取引の情報を知っていた。そして調べる内に、銘傑がその兵器を持っているのが分かったが、銘傑の居場所が分からない。そして身内を攫い、居場所を尋問する、もしくは銘傑との取引のための人質にする・・・」
「ボロジェンコは優秀な男だ。奴が連れてきてる連中は恐らく元スペツナズという特殊部隊の出身者だろう。やつらが静蕾を確保している間は、うかつに手が出せんな。ほんまに翔平、お前殺されずに済んで良かったなぁ」
しみじみとした所長の口調に、改めて背筋がすっと寒くなる。落ち着こうと珈琲を飲もうとしたとき、所長の携帯が鳴り出した。
「そうか、北野町の北野坂と山本通の・・・。ああ分かった。そこに昔、ロシア外務官僚だった奴の別荘があったんやな。で、今は使われていない・・・完璧やな」
どうやら片桐氏からのようだ。この会話を安全部が盗聴している。

この先の事態が全く僕には読めなくなってしまっている。
「まだ踏み込めんよ。早くても明日以降にはなるな。それとも、ＳＡＴでも出してくれるのか・・・。冗談や。こっちで何とかしてみるが、場合によっちゃ応援を頼むかもしれない」
そう言って所長は携帯を切った。
「仮定の話ばかりしていても仕方がない。この電話の内容を聞いた安全部は、すぐ動き始めるだろう。どういう手段を用いるか分からんが、こっちが明日にでも何か手を打つだろうと信じた安全部は早速動くだろう。今晩から張り込むぞ」
所長はそう言いながら、レシートを手にレジに向かった。
仮に安全部が武装して現場に突入しても、相手が元スペツナズなら無事では済まないだろう。
混乱に乗じて静蕾の救出を試みると所長は言うが、僕と所長の二人でなんとかなるものなのだろうか。現実感を伴わない高揚感と、恐らく良くて血を、そうでなければ死体を目にするかもしれないという現実感のある恐怖がしばし僕を縛り付ける。
煙草を灰皿で押し潰し、静蕾のために命がけになっている自分を冷静に分析してみようと努力する。例年の夏の憂鬱さが懐かしく、いかに大切であったものかを身に沁みて感じる。冷静になろうとする努力を放棄し、僕は所長の後を追いかけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3474y/

『途方に暮れた僕はそっとため息をついてみる』

2011年12月14日23時52分発行